

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	北見工業大学
プログラムの名称	夢を育む e-学生支援 ー ITシステムと個別担任制の連携による多様な学生へのきめ細かな学生支援ー
プログラム担当者	小林 道明
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学では、少子化や大学進学率の上昇に伴って多様な学生が入学してくる中で、学生が快適な学生生活を送り、社会での活躍にそれぞれ大きな『夢』を持って卒業していくための学生支援を目指している。</p> <p>そのために、これまでの学年担任制に加えて個別担任制を全学で実施し、教員は1学年あたり5人程度の学生を担当することにより、迅速できめ細かな学生支援を行う。</p> <p>また、学生の資質・能力・知識の多様化に対応するため、個々の学生の修学・生活状況等多元的な情報を集約した、電子ポートフォリオを学生支援に携わる教職員で共有し、修学の悩みや心の問題などに対して早期に適切な助言や指導を行う。</p> <p>さらに、ピア・サポート及びSNS（電子的な学生交流の場）を立ち上げ、学生同士の相談や交流・情報交換を活発化させ、学生の自主的活動を高めることで、学生による学生生活の良い環境づくりを支援する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>北見工業大学においては、学長のリーダーシップの下で、「学生の元気が大学の力」をテーマに掲げ、教職員による学生支援が従来のクラス担任制、教務課主導での評価制度の問題点を整理しながら、“学生の視点”に立った“face to face”の観点から、今後の取り組み方を計画（又は検討）されている点は、評価に値します。</p> <p>本取組は、①全必須科目の講義記録をリアルタイムでWeb管理し、学科内全教員が記録を共有することは、修学指導やメンタルヘルスケアの活用には最適と考えます。しかし、一方では、管理体制の強化に繋がる懸念があります。また、多様な学生を入学させているとのことですが、学生のフレキシブルな行動の芽を摘む危険性についての功罪に関しては、さらなる検討・考察を加えていく必要があると思料します。②「取組実施後の評価及び取組内容の改善策」と併せ、データが出そろってしまうことから、単位認定・進級時における判定基準等の学則等の運用をどうするかなどの観点から、結果公表と評価方法を慎重に行う必要があると思料します。③就職支援に関しては具体的な内容の説明が必要です。実際には、種々執り行っているはずですので、キャリア支援セミナー・就職ガイダンス・合同企業研究セミナー等の具体的な資料を準備しておく必要があると思料します。④ピア・サポートシステムとSNS（Social Networking Service）は、今後への期待を含めて高く評価できます。</p> <p>以上のことに留意する必要があると思料しますが、本取組は極めて優れており、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	宮城教育大学
プログラムの名称	障害学生も共に学べる総合的學生支援 －障害学生との共生により人間性豊かな社会人を育成するための入学から就職までの総合的學生支援システム構築－
プログラム担当者	藤島 省太
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学は、全国有数の全障害領域を網羅する特別支援教育教員養成課程を設置している。障害学生に対し全学的観点で修学支援に取り組んできた。この実績は、日本学生支援機構の障害学生支援拠点校としてモデル的役割を担い、社会的にも高い評価を得ている。また、この教育効果は、障害学生のみならず支援学生および一般学生にも好影響を与えている。</p> <p>本事業では、障害学生に対して入学から卒業・就職までを視野に入れた、総合的學生支援システムの構築を企図し、教職員・支援学生・障害学生の啓発・研修・就職支援を柱とする『学生教育研修事業』および障害学生への支援にかかるノウハウを活かした支援技術の向上・拡充を『障害学生支援技術開発促進事業』と位置づけ推進していくことにより、特別支援教育マインドを有した教員養成をおこなっていくものである。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>宮城教育大学は、障害学生支援のモデル校として、他大学の障害学生支援担当者の相談等にも対応しています。また、担当教員と障害学生による聴覚障害・肢体不自由・視覚障害の各グループと特別支援教育総合センターが、連携してプロジェクトを組織化し、ボランティア学生と協力して各種の支援活動をしています。また、教員養成大学であることから、将来教員を目指す学生たちに、いわゆる、弱者への支援という意識と行動を身に付けさせる活動は大変意義深いものです。</p> <p>今回申請のあった「障害学生も共に学べる総合的學生支援」の取組は、今までの努力が社会的に評価され、障害学生が増加した結果、今までのようなボランティアに全面的に頼った支援では立ち行かなくなったための対応策です。</p> <p>パソコンなどハード面を充実させて、活動を拡大・充実させようという今回の取組は、社会的に意義があり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	筑波技術大学
プログラムの名称	視・聴覚障害学生の専門性を高める学習支援 －視覚障害学生に対する情報アクセス支援と聴覚障害学生に対するコミュニケーション支援－
プログラム担当者	石原 保志
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学は、視覚や聴覚に障害のある学生のみを受け入れる国内唯一の高等教育機関である。我々はこれまで、障害毎に異なるニーズに対応した特別な学習支援環境を整えてきた。しかし学生を取り巻く状況が変化するなか、更なる専門性を高めるためには、視覚障害学生においては情報源に直接アクセスするための迅速で安全な移動を確保する仕組みが、聴覚障害学生においてはどこでも構築できるコミュニケーション支援環境が必要であることが分かってきた。そこで本プログラムでは、視覚障害学生向きには肉声に近い音声合成技術を用いたグループウェアの開発と、マルチモーダルな誘導システムの試験的導入を、聴覚障害学生向きには汎用性のあるオールインワン・パッケージの支援機器の開発及びこれを使用するための専門性を有する人材育成を行う。</p> <p>本プログラムで得られた成果は、日本学生支援機構などを通して、視・聴覚障害者が学ぶ一般大学に還元できる。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>筑波技術大学においては、視・聴覚に障害のある学生のみを受け入れる国内唯一の高等教育機関として、障害学生に対する支援を具体的かつ組織的に実施されており、障害者に対する種々のハードウェア・ソフトウェアを利用した障害補償システムの開発や障害に伴うこころの問題に対するケアにおいて、大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「視・聴覚障害学生の専門性を高める学習支援－視覚障害学生に対する情報アクセス支援と聴覚障害学生に対するコミュニケーション支援－」の取組においては、専門性を生かし、障害学生に対するさらなる学習支援機器の開発や支援環境の構築が計画されています。今後、様々な分野（医歯薬看護分野も含めて）における高等教育において、視・聴覚障害者の修学機会が増加することが予想されるため、その修学補償システムの開発と運用は緊急の社会的な課題と考えられます。貴学の学生支援プログラムは、このような社会的要請に合致したものと思われま</p> <p>す。</p> <p>本取組は、得られた成果を他の大学等にフィードバックすることも積極的に計画されており、大学等のみならず社会への還元も期待できる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	群馬大学
プログラムの名称	チューター制度を活用した臨床実習支援 －時代のニーズにマッチした臨床実習支援の在り方について－
プログラム担当者	田村 遵一
<p>(プログラムの概要)</p> <p>群馬大学医学部医学科は、入学時から一人一人の学生へ担任チューターを配置し、学生の資質を早期に把握した個別の学修・生活支援を行ってきた。本取組ではこのチューター制度をさらに拡充し、6年一貫のきめ細やかな支援を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●5年次生からの臨床実習に新たにクラークシップチューターを配置し、分散的となりがちな各診療科の指導に一貫性を持たせるとともに、巡回実習中にも継続して支援に当たる。 ●臨床実習に地域基幹病院での地域臨床実習を加える。担任チューターとクラークシップチューターは、地域医療実習を効果的に行うため、病院担当者や県行政と密な連携の下、臨床実習支援に当たる。 <p>新たなチューター制度を活用した臨床実習を通じて、地域医療に貢献するという使命感を高めることが期待でき、地域医療の担い手となる若手医師の育成にもつなげる。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>本取組は、群馬大学において従来から実施されてきたチューター制度をより拡充し、分散的となる医学部医学科における臨床実習教育においてもチューター制度（クラークシップチューターの配置）を新設し、6年一貫のきめ細かい、学生の視点に立脚した支援を行おうとするものです。</p> <p>具体的な計画としては、従来からのチューターとこの度新設されるクラークシップチューターが、学生一人一人の個性を十分把握・認識した上で、病院実習担当者と県行政担当者と密接な連携をとることにより、学生が臨床実習中に直面した問題に学生の個性に応じて最も適切に対処しているという非常に意欲的な試みです。本取組実施にあたっては、教員は今まで以上により多くの貢献を必要とされますが、幸い貴学においては、現在までのチューター制度を含む教育改革の中で、教員の意識も非常に高く、本取組の実効性は十分あると考えられます。</p> <p>今後の本取組の実施及びさらなる発展により、他の大学等における学生支援の良いモデルとなる優れた取組であり、教員個々の教育に対する意識改革のよい先例となる取組と言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	千葉大学
プログラムの名称	双方向の多様な場づくりによる学生総合支援 －ふれあいの環の多面的展開を通しての「総合的人間力」の涵養－
プログラム担当者	宮野 モモ子
<p>(プログラムの概要)</p> <p>学生支援は、単なる学生へのサービスではなく、学生の教育・研究活動をより一層充実したものにするために欠かせない活動である。「千葉大学憲章」ならびに「千葉大学行動規範」に明記されている理念に準拠し、この学生支援プログラムでは、学生たちの学生たちによるピア・サポートや自律的活動に基づく「総合的人間力」の習得に向け、これまでに実施してきたさまざまな学生支援活動を総合的・有機的に結合して双方向に展開するために、「ふれあいの環・学生総合支援センター」を創設する。そのセンターでは、学生と学生とがふれあう環、学生と地域市民がふれあう環、学生と卒業生がふれあう環、学生と教職員がふれあう環の四つの位相を学生主導で展開するとともに、それらのふれあいを教育・研究の基底に位置づけ、学生たちの自律的で総合的な人間形成に寄与することを目指す。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>千葉大学においては、学生支援に関して従来から目標を定め、様々な工夫を実施しており、その成果も評価できます。</p> <p>今回申請のあった「ふれあいの環・学生総合支援センター」構想は、社会的ニーズを的確に捉え、そのニーズを大学の学習に生かし、さらに「知の循環装置」を作り上げるという大変興味深いものです。また、学生のニーズに対応した様々な支援への取組は、すでに多くの効果を上げており、本取組でさらに持続的なPDCAシステムを構築し、「双方向支援」という新たな視点から、学生支援をさらに推進していこうとするもので、その成果も大いに期待できます。一つ一つの企画は決して目新しいものではありませんが、従来から進められている「グランドフェロー」制度（退職した教員が、ボランティアで学生相談に応じる）・千葉大コミュニティのSNS（ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス）・卒業生起業家との連携・けやき倶楽部（千葉大学の学外支援組織）などの活動が、有機的に連携するための申請であり、実効性があると思料します。</p> <p>本取組は、他の大学等の参考となる優れた取組であり、その成果も十分に期待できると判断します。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	東京学芸大学
プログラムの名称	学芸カフェテリアによる学修・キャリア支援 －全学の援助資源の活用と最適化された学生支援プログラムの開発－
プログラム担当者	久保田 慶一
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学は、「有為の教育者」の人材育成を目標とし、教育課程と一体化され、キャリア発達課題に対応した総合的・段階的な学生支援を行ってきた。平成 19 年度には従来の学生相談支援センターのキャリア支援部門を学生キャリア支援センターとして独立させ、これら 2 センターと学内のすべての学生支援組織と指導教員を統括する総合学生支援機構を設置する。新たな取組では、全学ファシリテーターが学内の潜在的な援助資源を発掘し、社会的ニーズに対応した多様な支援メニューを開発し、ウェブ上に開設された学芸カフェテリアで提供する。学生はキャリアプランナーのガイダンスを受け、自分の学修計画やキャリア発達課題に応じて、学芸カフェテリアから支援メニューを複数選択し、自分の最適な支援計画を立案できる。学生は自身のキャリア発達課題に気づき、解決に向けた選択・計画・行動のプロセスを経て、自らの支援コンピタンスをも高めていく。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>東京学芸大学においては、「期待される大学生生活」を学生に提示し、勉学のみならず、教育現場との多様な関わりやサークル活動・ボランティア活動などを通じて、学生の成長を目指しています。学生支援の取組を具体的かつ組織的に実施しており、大きな成果を上げていると言えます。また、「教育実習メンタルヘルス支援委員会」は、教員養成を中心とする大学ならではのユニークな活動であり、他の大学等の参考となります。</p> <p>今回申請のあった「学芸カフェテリアによる学修・キャリア支援」の取組は、学生支援のためのコンピタンスを「見える化」するために、ネット上に「学芸カフェテリア」を設け、それとともに、学生が支援メニューを選択し、積極的に自分のキャリア形成に参加するというものです。特に、学生支援に関わる情報を一元化し、さらにそれを成長させていこうとする試みはユニークで、アイデアとしても優れています。ただ、このシステムをより多くの学生が使いこなしていくためには、さらなる工夫が求められます。また、このシステムが大学の全教職員の総意のもとに運用される必要があります。</p> <p>全体として、創意工夫にあふれた企画であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	東京農工大学
プログラムの名称	新しい地球人養成プログラム －循環型社会を支える主体的学生活動の育成－
プログラム担当者	福嶋 司
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本プログラムは、「使命志向型教育研究—美しい地球持続のための全学的努力」という本学の基本理念のもとに、問題解決能力を持ち、自分で考えて実行する「責任を持つ賢い市民」の育成のために地域に貢献する学生の自主的な活動を支援する。既に地域において高い評価を得ている災害ボランティア、森づくりの会、ごみダイエット運動などの活動を積極的に支援するとともに、循環型社会を支える新しい活動を展開できるよう「新しい地球人養成プログラム」を立ち上げる。社会連携の視点に富む専門性の高い専任のコーディネータを配置し、学内外から持ち込まれる様々なアイデアを検証し、社会との連携に必要な情報を収集、ノウハウを蓄積し、成果の公開を行う。社会的ニーズが高い「ボランティア」、「リサイクル」、「ものづくり」の3つのグループを組織し、どのサークルでも支援が必要となればいつでも学生活動支援センター活動に参加できる体制をつくる。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>東京農工大学においては、学生支援に関する理念と目標に基づき、自治体との協働による地域貢献事業を推進しており、災害ボランティア活動や学術文化産業ネットワークへの参画などで大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>今回申請のあった「新しい地球人養成プログラム」の取組は、新たな社会的ニーズに対応したボランティア・リサイクル・ものづくりを通して学生を積極的に参加させる内容となっています。本取組は、学生が自発的に社会との関わりを持つことによって企画力やコミュニケーション能力が育成されると考えられ、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	東京工業大学
プログラムの名称	3相の〈ことづくり〉で社会へ架橋する －問題解決型支援から成長促進型支援へ－
プログラム担当者	三木 千壽
<p>(プログラムの概要)</p> <p>閉じた小宇宙に籠もりがちな理工系分野の学生たちに社会との接点を増やし、地域の科学教育やものづくりに積極的に関わる機会を設けて、行動力と視野の広さを兼ね備えた人材育成を旨とす。具体的には社会との関わり方を〈行動する〉〈伝える〉〈広げる〉の3相に分け、第1相〈行動する〉では学生シンクタンクでプロジェクトの実践経験を積み、第2相〈伝える〉では文章コミュニティで情報の発信力と受信力を錬磨し、第3相〈広げる〉では一千人留学生と交流することで留学生・日本人学生ともに真の異文化理解へ至る。</p> <p>この新たな取組は、すでに展開中の4本柱の学生支援体制をベースに推進する。すなわち、年間5,000件に及ぶ充実した個別相談受入を中心に(総合性)、日本人・留学生を区別なく(国際性)、学生の相互援助力を喚起し(自律性)、学生ニーズを集約する学勢調査を定期的実施する(双方向性)という全学挙げての支援体制である。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>本取組は、理系学生の陥りやすいコミュニケーション不足を解消し、社会との関わり方を「行動する」「伝える」「広げる」の3つの相に分けることを軸とした取組で、学生支援の理念・目標が明確であり、新たな取組の必要性・有効性も明解に示されています。これまでの真摯で地道な実践の積み重ねの上に立つものであり、確実な手応えを感じます。学生の9割以上が大学院修士課程進学という環境で、時間的・精神的・能力的に恵まれた学生がプロジェクトに関与しやすいため、学生自身の手で「ことづくり」の実現が図られる状況、また「援助的コミュニケーションについての講習」など、教員の苦心もうかがわれます。</p> <p>その成果の評価や改善の施策として、Webによる全学生アンケートシステム「学勢調査」や、卒業生の就職先企業・活動の対象となった小学校はもとより、海外からの定評ある評価基準を取り入れるなど周到であり、かつ人的支援としてコーディネーターを雇用し、各分野のクリエイターを講師に、また大学院生やポスドクを牽引役にするほか、地域連携を締結するなど、学内外の人材活用面でも効果が期待でき、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	新潟大学
プログラムの名称	ダブルホーム制による、いきいき学生支援 －地域協働による、学生の自律を目指す、予防的環境の構築－
プログラム担当者	河野 正司
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本取組は、学生が日常を過ごす拠点（ホーム）を、学部・学科の領域を越えて形成するものである。学部・学科の専門教育を行う従来の拠点である第一のホームに対して、新しい第二のホームは各々24名の規模で、文系・理系・医歯系の学生が集まる総合大学の特性を活かし、学年・領域が混じって構成される。第二のホームでは、将来の学生が専門家として行う様々なサービスの受け手である生活者の視点に立って地域連携に取り組む。自分を生活者の立場に映すことや多様な価値観の人たちと話すことにより、将来学生が直面する困難な課題に適切に対応できる力が養われる。このことが、学生の生活をいきいきとしたものに変えて、悩みに陥ることを未然に防ぐ優れた予防的環境となる。また、各自の専門性を生活者の立場からより深く認識することで、学習への強い動機が得られる。第二のホームでのネットワークは卒業後も、学生個人の生活や専門性を支援する財産となる。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>新潟大学においては、大学の目的等に基づき学生支援の目標を定め、学生支援の取組を長年にわたり、具体的かつ組織的に実施しており、その結果は、学長の学生との対話集会を高頻度を実施するなど、学生に大学生生活を充実させる効果において大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「ダブルホーム制による、いきいき学生支援」の取組は、総合大学の特徴を生かした異分野の学生間の連携による地域連携活動により、学生が悩みに陥ることを未然に防ぐ優れた予防的環境の醸成に効果が期待できるものになっており、また、それぞれの支援のプロセスが明確であり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>特に、生活者の視点に立った学生支援プログラムの取組にあっては、学生が潜在的に抱えている自分の専門に対する漠とした不安・意味づけに明確な回答を与えるものであり、他の大学（特に総合大学）等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	富山大学
プログラムの名称	「オフ」と「オン」の調和による学生支援 －高機能発達障害傾向を持つ学生への支援システムを中核として－
プログラム担当者	斎藤 清二
<p>(プログラムの概要)</p> <p>現代の若者の多くは「社会的コミュニケーションの困難さ」を有しており、そのため多彩な問題が大学や社会に生じている。このような傾向は、近年注目されている高機能発達障害の特徴と重なるものがあり、発達障害傾向をもつ学生に対する包括的な支援システムの確立は、現代の大学・社会が抱える問題への強力な支援ツールとなりうる。</p> <p>本プロジェクトではこのような学生に対して、オフラインとオンラインの二重支援システムを構築し実践する。オフラインシステムはトータルコミュニケーション支援室を核として、FDの企画、カウンセリング・コーチングによる直接支援、具体的に生じた問題へのサポートチームによる支援等を行う。オンラインシステムは、SNS を活用したネットワークを構築し、問題を抱える学生への継続的な支援、e-learning による自己学習ツールの提供、卒業後のキャリアコンサルティングなどを含めた継続的かつ総合的な支援を行う。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>本取組は、今まで問題が内在していながら、大学があまり真剣に取り組まなかった発達障害者への対応を大学全体として取り組んだ包括的なコミュニケーション支援プロジェクトとして大変意義深いものです。</p> <p>本取組の特徴としては、IT を最大限に利用したオンライン・ネットワークシステムと face-to-face のサポートというオフライン・ネットワークシステムを組み合わせている点に新規性・独自性が十分認められます。</p> <p>また、発達障害の学生にとっても、その学生を指導する教職員にとっても、また社会にとっても、ニートやフリーターの減少や問題行動の防止につながる本取組は、他教育機関の参考になるとともに、その成果に関する著しい効果が期待されます。</p> <p>人権的問題には十分配慮しながら、他の教育機関に事例を公表し、成果を共有して欲しいと考えます。さらに、カリキュラムとの関係、教員の指導法との関係など、教職員の理解向上のためのFD計画、より踏み込んだ教育体制へのフィードバックが望まれます。</p> <p>本取組が実行され、事例が積み上げられる中で、具体的な評価を得られることにより、社会的ニーズとなっている発達障害の学生への対応を含む学生のコミュニケーション能力の向上に寄与することを期待します。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	金沢大学
プログラムの名称	心と体の育成による成長支援プログラム －社会に幸せをもたらす生活の知恵を持った学生の育成－
プログラム担当者	吉川 弘明
<p>(プログラムの概要)</p> <p>金沢大学は従来の学生支援に医師（学校医、産業医）の視点を加え、すべての学生が自己に対しても、社会に対しても幸せをもたらす生活の知恵を身に付けて卒業する全学的教育プログラムを構築することを目指す。具体的には、平成 18 年度から導入した必修科目「大学・社会生活論」の「健康論」をより充実させつつ、健康診断の結果をもとに学生各自の高い水準での心身の自己管理能力を育成するとともに、コミュニケーション能力を育成する機会、および、安全衛生、健康支援等に関する科目を実践的な実習科目を含めて拡充し、社会全体の安全や健康を支援する他者援助精神を持つ人材育成を、従来以上に積極的に行う。プログラムの実施は保健管理センターを中心に、全部局が一体となって、すべての学生を対象に行う。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>金沢大学においては、心身の健康支援において着実な取組が行われてきています。</p> <p>また、今回申請のあった「心と体の育成による成長支援プログラム」の取組は、「健康論」等により、学生に健康の意義を認識させ、自己管理能力を育成することを目的とした特徴ある取組です。着実な個々の取組を統合して、大学の実情にあった支援プログラムに展開させようとする試みです。</p> <p>特に、学生のコミュニケーション能力を育成する取組は、他の大学等の参考となる取組であり、心身の総合的支援が行われることを期待します。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	信州大学
プログラムの名称	個性の自立を《補い》《高める》学生支援 －発達障害にも対応できる人間力向上支援プログラム－
プログラム担当者	小坂 共榮
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本プロジェクトは、人間力向上に焦点を当て、発達障害等のきわめて専門的な支援ニーズの高い学生への支援までをも実現するための取組である。これを全学で展開するために、既存の取組を再構成し、全学的組織である学生支援委員会において統括する。全1年次生に対して、質問紙・面接等により網羅的にニーズ把握を行い、自然に恵まれた本学ならではの、フィールド体験による予防的、開発的プログラムを提供する。その結果を受け、学生のニーズに応じて社会人としてのライフスキル（コミュニケーションスキル、対人関係スキル等）向上のためのプログラムを提供する。さらに個別的な支援を必要とする学生に対しては、修学支援、授業改善、医療相談、進路相談等を含む専門的支援が継続的に提供される。これらの連続的でユニバーサルデザイン化された支援システムは、多様な学生ニーズに応え、学生一人ひとりの潜在的な能力の開発と自己実現をめざすものである。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>信州大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を長年にわたり、具体的かつ組織的に実施しており、大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった、発達障害等の専門的な支援ニーズの高い学生までを含む総合的な学生支援の取組は、発達障害学生への支援、修学に困難を抱えている学生への支援などに関し、その把握から大きな解決に導くまで、それぞれの支援のプロセスが明確であり、また、他の学生支援との一体化、実施体制の一体化などに見られるように体系的であり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>特に、発達障害学生への支援の取組にあっては、多くの学生がメンタルヘルス面で潜在的に問題を抱え、さらに発達障害の学生もいるという想定に立って対応し、早期発見、早期対応・支援、そして、そうした支援教育を通して全学生の人間的成長の向上を目指す取組であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p> <p>発達障害学生への取組には、組織体制と知的資源が重要ですので、それらの充実を通して優れた成果を期待します。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	岐阜大学
プログラムの名称	生涯健康を目指した学生健康支援プログラム －生涯健康教育の推進と健康支援の充実－
プログラム担当者	佐々木 嘉三
<p>(プログラムの概要)</p> <p>大学は、教養・専門教育と並んで、肉体的・精神的に健康な学生を社会に送る責任がある。岐阜大学は、憲章と基本方針において、学生の健康支援と生涯健康教育を明文化し、肥満、痩せすぎ対策、喫煙対策、メンタルヘルスなどについて、次のような対策を講じている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新入生全員に対して健康診断を行い、問題のある学生には個別指導を行う。 2. 肥満(男子学生の 13%)、痩せすぎ(女子学生の 18%)に対して、糖尿病・肥満の専門医が血液検査に基づき栄養相談、健康相談を行う。 3. 学生に喫煙習慣をつけないため、キャンパスを全面禁煙にし、喫煙学生に対しては、ニコチンパッチを無料で配布している。喫煙学生は確実に減少している。 4. メンタルヘルスについて、精神科専門医が個別相談に応じる。 <p>本プログラムにおいては、「生涯健康教育」の推進に向けて、保健管理センターを中心に全学的なネットワークによる健康支援体制を充実して取り組む。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>岐阜大学においては、保健管理センターが中心となって、生涯健康教育を目標とした総合的な学生支援を実施してきており、学生の喫煙率の大幅減少など注目すべき成果を上げています。</p> <p>今回新たに、学生相談ラウンジの設置、IT 利用による健康指導等により、これまでの健康教育支援を深化させようとしており、高く評価できます。これにより、学生の自分自身の健康に対する意識が高まるものと期待されます。さらに、単に在学中だけでなく、卒業後における(健康への)学生の自己管理能力が増進することが期待できます。</p> <p>以上により、本取組は、他の大学等の参考となる先進的で優れたものであると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	名古屋大学
プログラムの名称	潜在的支援力を結集した支援メッシュの構築 －総合大学における学生の多様な「停滞」への対応のために－
プログラム担当者	鈴木 國文
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本取組では、総合大学の豊富な知的・文化的・人的資源を学生支援の潜在的支援力と捉え、それらを結集して大学生生活の入口・出口・停滞をおおうきめ細やかな支援の網を構築する。この体制を支援メッシュと定義する。</p> <p>具体的には、学生が学生を支えるしくみや悩みを持つ学生同士が交流する場など、多様なグループ活動を学生と協働で運営し、これらを網の目（メッシュ）のようにつなぐ。グループ活動では、従来のサークル活動とは異なり、専門家がオーガナイザーとして関わり、文化的活動を媒介として、学生同士のコミュニケーションの活性化をはかる。学生主体で運営されるが、教職員もこれを支え、学部横断的に展開する。この取り組みは、学生支援の専門家だけに委ねられるのではない、大学全体の支援力を高めることを目指すプログラムである。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>名古屋大学においては、現在の学生支援は基本的な形としてはよく整えられており、多方面にわたって地道な努力がなされ、着実な成果を上げていると言えます。他方で、必ずしも十分でない点に関しても、問題点の把握・明確化を通じてそれに的確に対処する堅実な姿勢が見て取れます。</p> <p>また、今回申請のあった「潜在的支援力を結集した支援メッシュの構築」の取組は、現状の問題点を踏まえたものとして明確に位置づけられており、大学の有する知的・文化的・人的なリソースを活用して、文化的活動を内容とする学生主体の種々のグループ活動を立ち上げ、それに心理学・精神医学の専門家がオーガナイザーとして関与し、また、教職員も関わる形を取りつつ、それらのグループ活動を繋いできめ細かな全学的なメッシュを構築していくことによって、特に不登校学生等の停滞学生への対処を念頭に置きながら、学生の入口から出口までの円滑化・豊潤化と問題解決を図ろうとするものであり、堅実で独自の発想に基づいたものであると言えます。</p> <p>評価・改善方法、実施計画・将来性に関してもよく考えられており、社会的ニーズ・学生のニーズに応えるものでもあり、特に停滞学生の問題は一般性があり、他の大学等にとっても参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	滋賀医科大学
プログラムの名称	地域「里親」による医学生支援プログラム －地域医療を担う医師・看護師の育成をめざす地域参加型の学生支援－
プログラム担当者	永田 啓
<p>(プログラムの概要)</p> <p>現在、地方での医師や看護師不足は深刻であり、地域医療を担う医師・看護師育成が強く求められている。本学では、地域の福祉施設や医療機関と連携して学生教育をすすめているが、新たに、「地域医療の担い手育成」を明確な目的とした学生支援策として、本取り組みを立案した。</p> <p>本取り組みは、従来の学内スタッフによる学生支援と連携して、地域での医療活動を志す医学生に対して、入学初年より、卒業生や住民を「里親」「プチ里親」として配置し、地域参加型の学生支援を実施するものである。</p> <p>本取り組みでは、地域で活躍中の卒業生を「里親」とし、献体登録者や模擬患者などとして本学の教育にご協力いただいている地域の方々を「プチ里親」とする。学生がこうした「里親」「プチ里親」と交流することで、地域医療へのモチベーションを持続発展させると同時に、地域住民の医療に対する思いを理解し、地域医療の担い手として成長することが期待できる。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>滋賀医科大学においては、学生支援に関して、明確な理念と目標に基づき積極的に取り組み、充実した組織体制の下において、学生支援施策に対する充実した評価・改善方法を構築するとともに、学生支援に係わる教職員の資質向上にも十分な取組を実施し、正課・課外の両側面にわたって多彩かつきめ細かな学生支援対策を進め、学生支援に大きな成果を上げています。</p> <p>今回申請のあった「地域「里親」による医学生支援プログラム」は、社会的ニーズに対応する「地域医療の担い手の育成」という明確な目的を持ち、しかも従来の学生支援と連携を図りながら、卒業生（地域で活躍中の卒業生）を「里親」、住民（献体登録者や模擬患者などとして教育にご協力いただいている地域住民）を「プチ里親」とする地域参加型の学生支援を実施するという工夫を凝らした独自の取組であると判断します。</p> <p>特に、医学部学生の抱える悩み・不安に着目し、「里親」・「プチ里親」との交流を通して、学生の不安や悩みに対応しつつ学生の人間的成長を図り、学生の地域医療に対するモチベーションを喚起しようとする積極的な取組は、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	大阪大学
プログラムの名称	市民社会におけるリーダーシップ養成支援 －「阪大スタイル」育成プログラムの開発－
プログラム担当者	大和谷 厚
<p>(プログラムの概要)</p> <p>大阪大学は、適塾と懐徳堂を源流とし、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに「教養・デザインカ・国際性」を教育理念とし、市民社会にロイヤリティをもち、リーダーシップを発揮する「阪大スタイル」の人材育成を目指している。今回の取組は「市民社会でのリーダー」開発を目指し、まずクラスやサークルのリーダーとなる学生を重点的に支援し育成し、この学生が核となり支援の輪が連鎖上に広がることにより、学生全体の意識の向上とレベルアップを図るためのプログラムを開発し実施する。対象は各学年で50名以下、総数200名以下とし公募と推薦により選定する。このプログラムの実施は学生部学生支援課およびキャリア支援室の事務職員が主体となって担当し、大学教育実践センターやコミュニケーションデザイン・センターの教員が積極的に協力する。また、プログラム開発には人材開発で実績のある民間コンサルティング企業のノウハウを利用する</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>大阪大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、積極的に学生の意見聴取、対話を行いながら学生支援の取組を具体的に実施しており、学生代表を学生支援組織の委員会審議に参加させることによって、学生の意見を反映させ、学生・教員・職員の連携を図るなど組織性も十分に認められます。</p> <p>今回申請のあった「市民社会でのリーダー」開発を目指した取組は、学生にとって受身でなく、主体性を重視したものであり、参加者が学んだことをクラスやサークルなどで実践し、支援の連鎖を起こすことにより学内の活性化を目指すプログラムを民間企業のノウハウを利用しながら開発・運営し、今まで裏方であった事務職員が主導的役割を担いながら、本取組で蓄積した知見・ノウハウを教養教育にフィードバックしていくなど、意欲的で独自性の感じられる取組と言えます。</p> <p>また、綿密な実施計画が立てられており、参加者同士による360度評価、専門家による客観的評価なども実施し、より精度の高い取組の創造を目指しており、他の大学等の参考となる優れた取組と言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	奈良女子大学
プログラムの名称	チャレンジする女性のキャリア形成支援 －卒業生ネットワークを活用した在学生・卒業生のキャリア形成支援－
プログラム担当者	井上 裕正
<p>(プログラムの概要)</p> <p>在学生に対するキャリア形成・就職支援の充実を図るとともに、卒業生・修了生に対し、結婚・出産・育児などの女性のライフサイクルに即したキャリア形成支援を目指す。</p> <p>本年からスタートした大学院人間文化研究科修了生ネットワーク構築のための大学院修了生キャリア支援メーリングリストの機能をさらに改善し、対象を学部学生にまで拡張したシステムを開発し、本学卒業生・修了生のデータベース構築を目指す。</p> <p>これによって卒業後の就・転職のための求人情報の提供や研究職志望者に対する研究職公募情報を卒業生に提供することにより再チャレンジを支援することができる。また、育児や介護・職業などに関する卒業生間の情報交換の場としての役割を担うことによって、卒業生ネットワークの形成にも資することができる。</p> <p>さらに大学と卒業生が一体となった在学生の支援やキャリア教育などの改善に繋げるとともに、将来的には、本学の就職支援体制の整備に繋げたい。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>本取組は、21世紀の新しい時代を担う社会のリーダーとして、男女共同参画社会の実現に貢献できる女性人材の養成を図ろうとしています。</p> <p>新しい試みとして、奈良女子大キャリアML（メーリングリスト）を作り、卒業生や大学院修了生のネットワーク作りの構築により、再チャレンジを目指すキャリア形成プログラムとして、新規性・独自性のある内容であり、企業や社会からも注目され、その大きな効果が期待されるものです。</p> <p>しかしながら、MLを効果的に利用する方法・組織・運用・管理などに対する具体的な計画性にやや欠けています。すでに実施されている大学院人間文化研究科のMLの実績や問題点を整理・検証し、今後展開される全学的なMLのシステムに反映して欲しいと考えます。</p> <p>そして、今後、計画が具体的に実行される中で、MLの有効な活用方法等に関し、ノウハウを蓄積し、卒業生・修了生のネットワーク作りに大いに発展する可能性があるものと期待します。さらに、貴学が、女性固有の育児支援を含むライフサイクルを視野においたキャリア支援に積極的に取り組み、将来、多くの女性リーダーを輩出することを期待します。</p> <p>以上のことから、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	島根大学
プログラムの名称	学生の自主的活動の評価と教育効果の向上
プログラム担当者	坂本 一光
<p>(プログラムの概要)</p> <p>大学における学生生活においては、正課以外のサークル活動、ボランティア活動、各種ガイダンス・セミナー等（以下「課外活動等」という。）の諸活動を行なうことが自立やコミュニケーション能力等の養成に役立ち、人間力の形成を涵養する。しかしながら、正課以外の課外活動等の諸活動に対しては評価が不十分な現状にある。</p> <p>本取組では、正課以外の諸活動への参加者に対してインセンティブ・ポイントの付与、ポイント交換の仕組みを構築し、大学が積極的に課外活動等を評価するとともに参加を誘導することにより、学習意欲の向上を図ることを目的とする。</p> <p>学生の諸活動の履歴は、履修状況、就職活動、面談記録等とともに一元的に参照できる既設の「学生電子カルテシステム」に登録する。それを参照し、指導教員等がきめ細かい指導を行なうとともに正課と正課外教育の相乗効果を検証することによって教育改善に資する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>本取組は、大学の正課以外のサークル活動・ボランティア活動・各種セミナーなどの活動への積極的な参加を学生に促し、自立やコミュニケーション能力の涵養を図ろうという施策です。</p> <p>諸活動に参加した学生には、今の時代にマッチしたポイントカードを持たせ、活動に応じてポイントを付与し、ポイントは教科書などを購入する時に金額換算するという、ユニークな取組です。</p> <p>また、学生時代に社会貢献活動やボランティア活動に参加することは、大変大事なことであり、そのきっかけにもなるであろうと思料します。この取組は社会的にも意義があり、またポイントカード活用というアイデアもあって、他の大学等の参考となる優れた取組であると考えます。今後、対象となる活動の範囲、活動内容によってポイント数に格差を設けることの是非などを検討すればさらに良いと考えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	愛媛大学
プログラムの名称	新時代の学生リーダー養成プログラム －愛媛大学リーダーズ・スクール(ELS)－
プログラム担当者	秦 敬治
<p>(プログラムの概要)</p> <p>新時代の学生リーダー養成プログラムである愛媛大学リーダーズ・スクール(ELS)は、学生リーダーや将来リーダーになり得る学生を支援・教育することで、本人の人間的な成長の促進、一般学生を率いることによる大学の活性化、卒業後の社会におけるリーダーシップ発揮による社会貢献を目指す取組である。</p> <p>ELSの第一の特徴は、これまで分離されがちであった授業と学生支援活動を横断的に組み合わせる「スクール」形式のプログラムである。</p> <p>第二は、学生生活におけるリーダー経験を重視するために、対象を2年生以上とする「高年次履修プログラム」である。</p> <p>第三は、米国高等教育基準向上協会が作成した「学生リーダー養成のための指針」に準拠したものである。</p> <p>第四は、「全国学生リーダーズ・ネットワーク」を構築し、学生リーダー養成の拠点大学として、学生支援関係職員のFD・SDを含めた他大学の学生支援にも関わることである。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>愛媛大学においては、愛媛大学大学憲章にうたわれた学生支援に関する目標等に基づき、具体的かつ組織的な学生支援の取組を実施してきており、その結果は、休学・退学者、引きこもり学生数の減少やカルト問題の沈静化などに実証されるように大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>今回申請のあった「新時代の学生リーダー養成プログラム」の取組は、学生リーダーや将来リーダーになり得る学生を対象とした支援・教育を実施することによって、学生の人間的な成長の促進、一般学生を率いることによる大学の活性化、卒業後の社会におけるリーダーシップ発揮による社会貢献を目指すプロセスが明確であり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>特に、愛媛大学リーダーズ・スクール(ELS)のゼミナールにおいては様々な教育技法を使用することで学生ニーズに対応しており、また「学生リーダーズ読本」を発行するなど、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	高知大学
プログラムの名称	コラボ考房と2つの道場が育む自律型人材 －教育的支援機能と活動実践の場の提供を基軸とする準正課システムの構築－
プログラム担当者	松永 健二
<p>(プログラムの概要)</p> <p>近年、社会では、企業の雇用形態の変化や価値観の多様化などを背景に「自律型人材」が求められている。自律型人材は、「社会性」、「意欲」、「知識技術的能力」を一体的・調和的に備えていることが不可欠である。しかし、従来の大学教育では、学生の意欲の低下にともない、知識技術的能力や社会性の修得も不十分となり、学生自身の内面での能力の統合化が図れていなかった。</p> <p>本取組では、社会協働系・自律系授業で顕在化した学生の意欲をさらに引出し高めるために、自発的な活動実践の場の提供及び、教員と社会人師匠による教育的支援を行う「準正課システム」を構築する。準正課システムでは、グループで社会的課題に取り組む「コラボ考房」や、個人の能力・資質の向上を目指す「ファシリテーション力養成道場」と「企画立案力養成道場」を実践の場とし、社会性、意欲、知識技術的能力を向上させながら統合化することにより、自律型人材の育成を目指す。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>高知大学においては、大学の特殊性に基づく人材育成理念、学生支援の組織体制及び実施、IT基盤等が充実していると認められます。</p> <p>その上に基づく「準正課システム」はインターンシップとの棲み分けの点や他の大学に類似の例はあるものの、学生の問題意識を高める工夫がなされており、地域との連携を含む実施の過程が明確で、これまでの実績を踏まえて発展的展開が期待され、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	長崎大学
プログラムの名称	学生が自ら育む人間関係力醸成プログラム －学生の自立的行動を大学と地域が協働して取組む支援－
プログラム担当者	管原 正志
<p>(プログラムの概要)</p> <p>長崎はその昔から、全国から若者が蝟集して勉学に励み、町の人々も彼らを温かく迎えた。すなわち、長崎は町全体が学校であり、若者を育てた。21世紀の今、長崎の人々、長崎県・長崎市、長崎大学が協働して、「学生の人間関係力」を育てる。</p> <p>長崎には「おくんち」を始め、数多の伝統ある地域行事がある。しかし、その行事は準備期間も含め約6ヶ月を要し、かつ若年者が不足しているため、地域伝統行事の維持が危ぶまれている。</p> <p>本プログラムは、「学生顧客主義」の標語の下で、本学学生が地域伝統行事に参加して、その維持に力を尽くしてきた町の人々や豊富な知識と経験を持つ市民からなる「長崎大学応援団」の指導・連携・協力のもとに、昔の町内の若者頭的な役割を果たせるよう「やってみゅーでスク」を組織して取組む。</p> <p>地域の古老、指導者、子供たちと祭りの企画・準備等により、学生の「人間関係力」の醸成と、地域行事の活性化・リニューアルが期待される。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>本取組は、大学の「学生顧客主義」というユニークな基本理念を反映させるものとして、学生の人間関係力の醸成と地域行事の活性化・リニューアルを目指し、市民等から成る「長崎大学応援団」を結成するとともに、大学・学生・地域連携に基づく「やってみゅーでスク」を組織して総合的な学生支援を行おうとするものです。</p> <p>早くから学生のニーズを把握するとともに、学生支援に関わる教職員の資質能力の向上に組織的に取り組み、また、学生の自主企画を大学として支援し続けています。大学と地域とが協働して学生の自立的活動を支援し、キャンパスライフの一層の活性化を実現しようとする優れた取組であり、その実践は他の大学等にも大いに参考となるものであると認められます。特に、人間関係力醸成の包括支援体制としての「コミュニティライフ・アドバイザー（CLアドバイザー）」の配置構想は特筆できるものです。</p> <p>今後は、新たな取組に対する効果や有効性を検証しながら、さらなる工夫・改善に努められることを期待します。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	秋田県立大学
プログラムの名称	薫風・満天フィールド交流塾が育む人間力 －遊びと農業の教育力が若者と社会を結ぶ－
プログラム担当者	小林 由喜也
<p>(プログラムの概要)</p> <p>若者の人間力向上という社会的要請に応えるため、自然との交流（遊び）と農業の教育力を活かした学生支援を行い、行動力と創造力に富み社会性豊かな人材を育てようとする取組である。その内容は、①豊かな自然、農業・農村、それらを教育研究している多様な教員を資源とした「フィールド交流塾」を開設する。②ここでは、学生が様々な動植物に触れ自然のなかで遊び、農業を体験し、感性、探求心、コミュニケーション力、行動力および創造力を培う。さらに、③農村に出て地域の人々と生活や作業を共に行う中で、農村の伝統や文化に触れる。そして、思いやりの心、達成感、協調性を育み、農村生活への理解を深め、社会性を向上させる。</p> <p>交流塾での体験は、学生の講義等学修への動機付けを明確にし、勉学意欲を高める。交流塾と学修の相乗効果により、本学部のめざす人間と生物資源との関わりを理解し、未来を逞しく切り拓く人材が育つと期待される。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>秋田県立大学においては、学生支援を行う教職員の資質向上のためのFD・SD活動に積極的に取り組むなど、包括的な支援の実効性確保のための取組を着実に実施されています。</p> <p>今回申請のあった「薫風・満天フィールド交流塾が育む人間力」の取組は、大学が保有する豊かな環境資源を活用し、自然を教育者と見立て、若者の人間力を育むことをねらっているものであり、「人間力向上」という新たな社会的ニーズに対応した地方大学ならではの特色ある学生支援であると考えられます。</p> <p>本取組は、学生に自然や農業との交流で「遊び」を経験させ、その「遊び」を起点として、人や社会に対する様々な「気づき」を持たせ、最終的に「人間力向上」を図るというものであり、この「遊び」に向けたエネルギーを利用して、様々な「気づき」に到達させようとするところに、本取組のアイデアがあると考えられます。</p> <p>地域との連携、農学系サークルの大学間ネットワークの構築など、学外との連携も計画されており、この取組の社会的効果が期待され、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	会津大学
プログラムの名称	プロジェクト卒業生 240 + α —一人ひとりの学生が初心を忘れずに志を貫くための支援策—
プログラム担当者	太田 光一
<p>(プログラムの概要)</p> <p>会津大学は平成 5 年に日本で初のコンピュータ理工学を専門とする単科大学として誕生した。コンピュータが不可欠な 21 世紀の社会において、国際社会に通用する研究者・技術者・起業家の育成が本学の目標である。この目標を達成し、留年・中退を減らして入学定員 240 名に相当する数の卒業生を毎年輩出することを、このプログラムの目標とする。このために、以下の支援を実施する。</p> <p>I. 修学支援 (1) 合格から入学時までのリメディアル教育の実施 (2) 修学支援室の設置による落ちこぼし防止 (3) 履修アドバイザーによる 4 年間の履修指導体制の確立 (4) FD、SD の実施。</p> <p>II. キャリア支援による学習のモチベーションの維持。</p> <p>III. 健康・メンタルヘルス支援体制の充実強化 (1) 相談室の充実 (2) 保健室を中心とした健康管理、食事指導、栄養指導 (3) トレーニング室の運動設備の充実更新、運動指導体制の確立、など。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>会津大学においては、平成 5 年の開校以来、学生支援に関する目標等に基づき、具体的かつ組織的に学生支援を実施しており、その結果、コンピュータ理工学専攻の学生に特有の課題を克服するために、修学支援・キャリア支援・健康・メンタルヘルス支援等に積極的に取り組んでいます。</p> <p>また、今回申請のあった「プロジェクト卒業生 240 + α」の取組は、従来の取組に対する客観的な評価結果を基にして、特に留年・退学などに代表される学業を途中で放棄する学生を減らし、質を維持しつつ量の拡大を目指して入学者全員が卒業することを目標とした組織的で実践可能性の高い取組として高く評価できます。</p> <p>特に、コンピュータ理工学専攻の学生の陥りやすい問題の分析を丁寧に行い、その結果である、リメディアル教育を含んだ修学指導・食事指導・栄養指導・運動指導の体制化はユニークであるとともに、同様の大学等のモデルとなる取組であり、また、学生支援に関わる複数の組織の統合化、学生支援に関する教職員の専門家志向は、他大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p> <p>今後、コンピュータの専門家であるだけでなく優れた職業人となるため、地域の企業等の協力を得て、学生の社会的発達を促すことが付け加えられることで、目標の達成に一層貢献できると考えられます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	大阪府立大学
プログラムの名称	WEB学生サービスセンター構想
プログラム担当者	石井 実
<p>(プログラムの概要)</p> <p>WEB学生サービスセンター構想は、学生への情報提供の質、スピードを飛躍的に向上させ、学生へのサービスの充実を図るものである。大学からの一方通行の情報提供ではなく、学生からのアクセスに対し情報提供を行う、双方向によるものである。具体的には、WEB学生サービスセンターのホームページを立ち上げ、WEBワンストップサービスへの入口を設ける。大学に関することなら全てここから情報提供が受けられるサービスである。このサイトには、授業時間期間中なら毎日WEB心の相談が受けられるコーナーがある。また、キャンパス間を回線でつなぎ、テレビ電話による心の相談も行う。この他、学内に電光掲示板を設置し、大学情報のヘッドラインニュースを流し、掲示板、ホームページなど情報提供手段への誘導を行う。またWEB学生サービスセンター運営委員会を組織し、真に役立つサービスを提供できるよう学生・保証人（保護者）の参画を得る。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>大阪府立大学においては、学生支援の取組に関して、学生センターを中心に組織的に取り組んでおり、学生提案箱に寄せられた学生からの要望に対し通信誌を通して学生にフィードバックするなど、学生支援の取組を着実に実施されています。</p> <p>今回申請のあった「WEB学生サービスセンター構想」の取組は、それらの学生からの相談に対して迅速に対応でき、電光掲示板を通して新しい情報を常に学生に提供できる体制が整うものと考えられます。さらに、WEBを通して学生の抱える心理的な相談に対しても迅速かつ個別に対応できるシステムを構築するなど、他の大学等の参考となる優れた取組と言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	和歌山県立医科大学
プログラムの名称	実践的「地域医療マインド」育成プログラム －社会的ニーズに対応した医療人の育成をめざして－
プログラム担当者	仙波 恵美子
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学の学生支援の目標は、ケアマインドの育成と人間力・自主性の育成である。そのため、カリキュラムの改革、ボランティア活動の支援、学生相談室による心のケアに取り組んできた。</p> <p>今、地域医療が崩壊の危機に瀕している。医療の原点、主人公は、病気や障害を抱えて地域に暮らす人々である。「地域医療」のネガティブなイメージを払拭して、その魅力とやりがいを学生時代から体験させる必要がある。カリキュラムの中で医療を必要としている現場を体験して、どのような医師や看護師が求められているかを肌で感じさせる。地域医療サークルなど学生の自主的活動と自主カリキュラムを支援する。</p> <p>以上の取組を大学として推進するため「地域医療マインド育成センター」を設置する。</p> <p>さらに、本学に既存の「生涯研修・地域医療支援センター」と「地域医療学講座」との連携を図り、「地域医療マインド」を生かす実践の場として魅力的な地域医療の現場を創出する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>和歌山県立医科大学においては、社会的ニーズに応じた医療人の育成を目指しています。目標は、ケアマインドの育成と人間力・自主性の育成です。そのため、積極的にカリキュラム改革に取り組んでいます。地域医療が崩壊の危機に瀕している現在、医療の原点及び主人公は、病気や障害を抱えて地域に暮らす人々であることを再認識し、「地域医療」の魅力とやりがいを学生時代から体験させるために、カリキュラムの中で医療を必要としている現場を体験させています。</p> <p>特に、既存の「生涯研修・地域医療支援センター」と「地域医療学講座」との連携を図り、「地域医療マインド」を生かす実践の場として魅力的な地域医療の現場を創出することに努力している点が高く評価され、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	島根県立大学
プログラムの名称	双方向的情報システムの構築による学生支援 －21 世紀を見据えた高度情報化社会における学生支援の展開－
プログラム担当者	堀内 好浩
<p>(プログラムの概要)</p> <p>工業化社会が成熟した日本経済は、人材、資金、技術の面において、国籍も年齢も人種も関係なく国境を越えて平準化、流動化が進み、雇用環境は厳しさを増すことが想定される。</p> <p>一方で、確固たる「仕事感」と社会生活における協働意識の重要性を深く理解しないままに就業し、現実の社会生活におけるギャップを乗り越えられずに、雇用環境の厳しさを理解せず離職している学生像が浮かび上がってきている。また、企業側が厳しい経営環境の中で十分に職業における教育を行う余裕がないことも、離職を誘発する一因として同様に浮び上がっている。</p> <p>このため、本学としては、マルチメディアを活用した学生支援プログラムを開発し、キャリア教育を強化して学生に強い「仕事感」を植え付けるとともに、遠隔地にいる既卒者に対しても、双方向的な学習情報提供交換システムを整備して、離職防止の観点も含めた回帰循環的に生涯学習の支援を行う。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>島根県立大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を平成 12 年の建学以来、具体的かつ組織的に実施しており、大学基準協会からも高い評価を受けている地域との交流や地域の観光資源の活性化に向けた活動において実証されるように、大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「双方向的情報システムの構築による学生支援」の取組は、新規の大卒者の約 35%が3 年以内に離職しているという、学生にとっても企業にとっても不幸な状況の改善を目指しており、地方に所在するという時間的・距離的等のハンデを克服するために、マルチメディアを利用することの有効性は大いに理解できます。ただし、マルチメディアに過度に依存することなく、学生及び卒業生に直接的に関わっていく「face to face」でのサポートの重要性・有効性を忘れることなく、取組を進めていく必要があると思われまます。</p> <p>本取組は、大きな成果を作り出し、同様の問題を抱える他の地方大学等の参考となる優れた取組であると言えます。地域での期待にさらに応えていくことを望みます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	山口県立大学
プログラムの名称	総合的人間関係力を涵養する学生支援 －大学と地域で作るプレ社会における実践的トレーニング－
プログラム担当者	田中 マキ子
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本プログラムは、昨今の大学生の人と関わる力の低下を学生個々の能力の低下ではなく、生活経験や社会体験の不足から来るものと考え、学生支援の観点からその経験を補っていくことを目的としている。大学及びそれを取り巻く地域社会を現実の社会の前段階であるプレ社会ととらえ、このプレ社会において、学生が大学や地域社会の要請に応じて様々な取組を行うことによって、学生同士は言うまでもなく世代や職種の異なる多くの人々と関わり、体験を通じて自主・自立の精神を養い、総合的人間関係力を身につけることが狙いである。これらの取組は、学生を大学のゲストではなくスタッフとしてとらえるジュニア TA 制度によって支えられる。特に、本学の校是「地域社会との共生」の実現のため、大学内に専門のコーディネーター機関を設置して積極的に地域との連携をしていくことにより、地域社会にも活力を与えるという双方向性を持つ。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>山口県立大学においては、平成 18 年 4 月に新しい大学として改組し、地域に密着しつつ、自主・自立した精神に立脚して「総合的人間関係力を持った人材」を送り出すべく学生支援を組織的に行っている点が評価されます。</p> <p>また、今回申請のあった「総合的人間関係力を滋養する学生支援」における「学生の地域サービス」・「ちょっと聞いてよ Box」の取組は、学生の社会性の向上、悩みのある学生の早期発掘及び支援など問題解決までのプロセスが明確であり、他に見られない工夫ある取組と言えます。「ジュニア TA 制度」はすでに他の大学でも取り扱われており新しさは見出されませんが、学生アルバイトとの違いを明確にし、貴学が目標としている総合的人間関係力の向上に資する制度に発展させることを期待します。</p> <p>地域との密接な連携により、「小さな社会（プレ社会）」を形成し、学生の「人と関わる力」を養成する貴学の視点は、地方型小規模大学等に対して多くの示唆を与え参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	東北福祉大学
プログラムの名称	健康の自己管理能力を養う食育支援 －生きる力を確かなものにする青年期の食育実践プログラム－
プログラム担当者	福富 哲也
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本取組は、学生自らに食行動の改善点を見出させ、望ましい食生活実践を通して健康の自己管理能力を確たるものにさせることをめざす。この能力は体、心、社会的な面、精神の全てにおいてバランスがとれたウェルビーイングな状態を創出する生きる力を意味する。農業体験「自産自消」などの独自プログラムによる学習機会を得、学生個々の食の営みの自立、食の個人文化の醸成、食の感性の陶冶を可能にし得るものとする。食育を機軸にした健康教育の取組は、国策と連動した社会ニーズの高い取組であり、かつ取組の成果は地域社会に還元でき、社会的貢献度も高い。異なる環境下で一人暮らしを余儀なくされた学生や体育会系部活動を行っている学生、アレルギーを持つ学生、留学生、身体に障害のある学生を対象にした食育による心身の健康管理援助や快適な食生活環境構築の多面的な支援は学生ニーズに対応しており、共通課題を有する他大学のモデルになり得よう。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>東北福祉大学においては、学生支援に関する明確な理念や目標を持ち、基本的な取組がなされて成果が上げられており、特に健康観についての意識向上を目指す取組において独自の成果が見られると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「健康の自己管理能力を養う食育支援」の取組は、食育を中心に据えて学生に自己自身を省みさせ、健康を梃子にして自己管理能力を付けさせ、そのことを通じて、心・体・社会の3面にわたった生きる力を育むことを意図したもので、独自の発想に基づくものであり、また、従来からの取組を踏まえており、成果を期待し得るだけの計画性を持っていると言えます。</p> <p>特に、学食での食育支援連動システムと一人暮らし学生に対する食育支援プログラムは、学生の健康面の支援として有効であるだけでなく、学生の自己管理能力を育む点からも期待できる内容となっており、また、学生が地域農業者との協働をも交えつつ、学食の残飯等から作った有機肥料を活用して農作物を栽培・収穫し、それを食する「自産自消」の取組は、学生に、農事や食物、労働や協働への理解を促し、自然や社会性の意義を認識させる点でも成果を上げ得ると言え、他の大学等にとっても参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	東北公益文科大学
プログラムの名称	インクルージョン社会をめざした大学づくり －特別なニーズをもつ学生への「共育」支援を通して－
プログラム担当者	伊藤 眞知子
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本プログラムは、特別なニーズをもつ学生（障害をもつ学生、心理的な問題を抱える学生等）への支援を通して、学生の人間的成長を促進することを目的とする。主な取組として、支援体制を充実強化するために学生共育支援室を設置し、支援実践のデータベース化を図る。支援室では、特に支援が困難な発達障害をもつ学生への個別支援プログラムの開発・実施を行い、個別のニーズに基づいた支援モデルを構築する。また、障害への理解促進のための啓発活動やピア・サポートによる支援実践により、学生及び教職員がともに学び成長できる「共育」環境の整備を図る。さらに、学生の参画を中心とした地域社会との協働事業等を展開し、市民のインクルージョン社会に対する理解と活動を促進する。これらは、学生を「共生社会」を担う市民として育成することにつながり、延いては、すべての人が排除されることなく幸せに生きられるインクルージョン社会の実現に貢献する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>東北公益文科大学においては、学生支援に対する基本的考え方として、「大学まちづくり」を理念に掲げ、地方小規模大学ならではの、きめ細かな支援、及び「公益」という理念を実践する人材育成の支援を目標にし、個性的な人材育成に一定の成果を上げていけると言えます。</p> <p>学生支援に対する現在の取組の組織性は一般的な組織化及び連携が図られているものの、必ずしも十分とは言えない状況であると思料します。しかし、学生支援を行う教職員の資質向上については「FD世話人」を置き、FDに積極的に取り組む姿勢が見受けられ、また、特別なニーズを持つ学生数は全学生の約 10%と多く、障害のある学生を積極的に受け入れており、学生支援に対する現在の基本的な取組の状況も努力の姿勢が見受けられます。</p> <p>今回申請のあった「インクルージョン社会をめざした大学づくり」の取組で、学生共育支援室の設置、学生支援実践のデータベース化、学生・教職員の「共育」環境の整備などは、学生と教職員がともに学び合い成長する「共育」を目指した、地方の小規模大学ならではの特色を生かした取組であると言えます。特に学生支援実践のデータベース化、及び発達障害のある学生の個別支援プログラムの構築は、経験の集積がなされる効果が期待できます。現在、発達障害のある学生への対応方法は試行錯誤の状態にあります。</p> <p>本取組を契機に今後とも発達障害のある学生を積極的に受け入れ、大学における適切な対応方法の確立及び発達障害のある学生の社会との連携についてのモデルの構築が期待され、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。なお、個人情報保護には十分に留意した計画の策定を望みます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	慶應義塾大学
プログラムの名称	卒業生と連携した地域協働型政策研究支援 ーフィールドワークと地域協働型政策研究支援プログラムー
プログラム担当者	古谷 知之
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本プログラムでは、学生の地域協働型政策研究ニーズと卒業生・地域の学生支援ニーズを背景に、学生・卒業生・教員の人材・知財データベースを構築し、そのネットワーク化を図る。それにより、学生による国内のフィールドワークを重視した地域協働型政策研究支援を行う。学生が地域政策課題を卒業生・教員とともに体験・学習し、政策立案に至る過程を理解する機会を提供する。まず、湘南藤沢キャンパスで政策研究支援機構と連携した取組みを開始する。その後、他学部にも取組みを拡大し、学生の政策研究支援に関する学内連携の体制を強化する。構築した体制や仕組みを基に、慶應義塾の膨大な卒業生（塾員）ネットワークを活用した、全国規模での学生のフィールドワーク支援・政策研究支援の強化、及び卒業後の地方就業促進を期待している。この取組みを通じて、「独立して生きる力」と「協力して生きる力」の両方を備えた「未来への先導者」の育成を目指す。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>慶應義塾大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、建学の精神と歴史的伝統を生かしながら、学生の地域協働型活動の支援を具体的かつ組織的に実施しており、社会のリーダーとして活躍する人材を多く輩出していると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「卒業生と連携した地域協働型政策研究支援」の取組は、「独立して生きる力」「協力して生きる力」を備えた人間の育成を目指して、学生に地域政策課題を卒業生・教員とともに体験・学習させ、政策立案に至る過程を理解する機会を提供するものです。それぞれの支援のプロセスが明確であり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>特に、湘南藤沢キャンパスで政策研究支援機構と連携した取組は、学部間・キャンパス間の枠を超えて当該学生がさらに国内の地域に関心を持ち、自分の活動場所を見出し、卒業生や地域社会との交流を通じ、人間的に成長することを促進する取組であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	國學院大学
プログラムの名称	学生みずから発信する「自分史」作成支援 －社会のなかでの自己活用力養成プログラム－
プログラム担当者	遠藤 彰郎
<p>(プログラムの概要)</p> <p>國學院大学では、徳性の涵養を謳う建学の精神に基づき、全学的学生支援に取り組んでいる。独自に開発したWeb学生支援システム K-SMAPY を活用することにより、役割分担を超えた支援を実現すると共に修学相談、キャリア形成支援、保護者会における人的支援を充実させてきた。さらに情報セキュリティを強化して社会的責任を果たすため、ISO27001 を取得し、認証評価を通じて教員・職員の意識とスキル向上を図っている。新たな取組では従来の支援による成果を分析した結果をふまえ、コンピテンシー診断を導入して学生に「振り返り」と自己発見の機会を提供する。同時に学生の意識改革と人間的成長を促すWeb版自発的ポートフォリオの作成を推進していく。学生は「自分史」を作り上げる作業を通して視野を広げ、社会人基礎力を育むことになる。これによって中途退学者を減らし、社会的課題であるニート・フリーター対策にも資するプログラムとする。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>國學院大学では、長年にわたってITシステムを活用した学生支援の取組が行われてきており、独自に開発されたWeb支援システムは、大きな成果を上げています。</p> <p>また、今回申請のあった「学生みずから発信する『自分史』作成支援」の取組は、修学意欲の啓発、自己理解の伴うキャリア形成、教員の学生支援の精緻化などを目的としたものであり、学生の自己診断、学生ポートフォリオの作成等によって、学生支援をさらに展開させようとする有意義な試みです。</p> <p>特に、不本意入学者や修学意欲の低い学生の支援を行う上で、この取組は、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	東京家政大学
プログラムの名称	出身地域へのアウトリーチによる自立支援 －地方の時代を支える人材育成プラン－
プログラム担当者	岩井 絹江
<p>(プログラムの概要)</p> <p>東京・埼玉以外の出身者が半数を占める本学では、20年来、教職員が全国の高校に出向き、出張授業・進路講演・面談での高大連携に努めてきた。この交流での実感では、近年親子双方に地元志向がとみに強まっており、本学の在學生にあっても卒業後は出身地に戻って専門職に就きたいとの希望者が多い。そこで平成15年度より教職員・在學生保護者の組織「後援会」、卒業生の組織「緑窓会」が三位一体となって、全国各ブロックの保護者を対象に個別相談・懇談会・講演会によって学習支援・進路支援・親子の相互理解支援を行ってきた。若者の都市集中が地方の空洞化を招きつつあるいま、地方の活性化には若者のふるさとUターンが喫緊の課題である。学生が人間力をつけ適職に就くためにも、新しいニーズに対応する学生支援プログラムとして、親子の相互理解を核とした四者面談方式による継続的な自立支援を学生の出身地域へのアウトリーチで行うものである。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>東京家政大学の「社会性・協調性・コミュニケーション力を有する人間の育成」を学生支援の目標とする現在の取組は、各委員会やセンターに加えて在學生保護者の会及び卒業生の会の支援の下、多方面にわたって組織的に機能するよう考えられて実施されていますが、これは創立126年の伝統に裏打ちされた長年の努力の積み重ねの上に築き上げられたものと高く評価できます。</p> <p>今回の申請は、親子の相互理解・支援の下、学生自身が自分のキャリアデザイン、ライフプランを明確にして行動できるように支援することを基本理念としており、保護者の希望を満たしながら学生の自立支援を行うとともに、学生の出身地へのUターンの円滑化によって地方の活性化に貢献しようとするユニークな取組であり、新たな社会的ニーズに対応するものと評価できます。そして、その具体化のために従前から取り組んできた地区懇談会等の延長線上に位置づけられる地区コーディネーター等の組織的支援システムを構築する構想は、地に足のついた実現性の高い取組と考えられます。</p> <p>特に、保護者や学生の出身地と連携しつつ、在学中の幅広い各種支援に加えて、入学前（入学前教育）から卒業後（転職相談やリカレント教育）に至るまでの長期にわたる貴学の学生支援の取組は、他の大学等のこれからの学生支援のあり方の多くに示唆を与えるものとして評価できます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	東京経済大学
プログラムの名称	TKUベーシックプログラム ー学生・教職員の協働による体系的「TKUベーシック力(10のちから)」の修得ー
プログラム担当者	堺 憲一
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学は、2007年度より、これまで行ってきた正課・課外の各種学生支援をより体系的に充実させると同時に、建学の理念の具現化と社会的要請の強い「社会人基礎力の育成」を目指して、「TKUベーシックプログラム」をスタートさせた。そのため、すべての学部学生が身につけてほしい「10の力」を「TKUベーシック力」と定め、「〇〇ができるようになる」という身近な目標を提示し、修得の具体的なガイドとなる「TKUベーシック力ブック」を作成した。さらに「TKUベーシック力」の修得支援を行い、入学から卒業まで総合的にサポートする「学習センター」を新たに設け、個別相談や独自講座・イベントを行う。「学習センター」の企画・運営は、「教員運営委員」、入学から卒業までに関わるすべての学生支援部署から選抜された「職員サポーター」、学生会をはじめとする学生諸団体代表による「学生サポーター」の三者の協働で行われる点が特長である。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>東京経済大学においては、学生支援に対する明確な理念や目標を持ち十分な効果が得られていると認められます。現在の取組も学生支援等担当副学長を置き、その指揮下に設置した「学生支援会議」を通じて体系づけられており、教員組織と事務組織が一体となった意思決定手順や実施体制が十分整っていると認められます。</p> <p>今回申請のあった「TKUベーシックプログラム」の取組は、単に「基礎学力」をつけさせるというものでなく、社会的ニーズに呼応する「社会人基礎力の育成」を目指し、入学してくる学生に対して「建学の精神」を十分に教育することによる「アイデンティティーの確立」を根底に置いた上にプログラムが策定されていることに優れた意義が認められます。また、新たに開設される「学習センター」は、学生・教職員が協働して企画・運営を行うという学生参加型であることも評価できます。</p> <p>現在の学生支援の取組を発展させる形で、新たな取組が立案されており、これを実施することにより十分な効果の拡大が期待され、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	東京女子大学
プログラムの名称	マイライフ・マイライブラリー －学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム－
プログラム担当者	小林 一章
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本取組は、図書館を、学生一人ひとりの潜在的な生きる力を引き出し（＝マイライフ支援）、活気に満ちた知的探求の拠点となる「滞在型図書館」＝「マイライブラリー」に発展させ、学習支援のために学生アシスタントを積極的に活用する学生協働サポート体制を整備する。学生はそれぞれのニーズに応じて、図書館内学習支援の利用、図書館以外の学内諸部署と連繋して企画される各種の研修・セミナー等への参加、学生アシスタントからの助言等を選択できる。これら多様なサービスを利用することで、思考力、行動力、コミュニケーション力を養い、社会人基礎力を身に付けることができ、本学が目指す女性のキャリア構築力の育成につながる。また、「支援される立場」から学生アシスタントとして「支援する立場」へとステップアップしていく可能性も期待でき、学生相互の自発的交流を通して、繋がり合い、啓発し合い、社会人としての資質をも高めることを目指す。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>東京女子大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を5年以上にわたり、具体的かつ組織的に実施しており、その結果は例えば、平成 15 年度「特色ある大学教育支援プログラム」、平成 16 年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に選定されたことで実証されるように、大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>今回申請のあった取組についても、活字離れが進行し、多くの大学で図書館利用率が減少していると言われる中で、図書館に着目したことのみならず、専門家との連携の下に、学生や大学院生を活用して、学生の図書館利用を支援するという発想に基づく学生支援策は、独自性が認められ、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。さらに、すでに学生支援目的での図書館の改修というハード面の整備が進み、それと連動させた取組になっている点も、取組の連続性が確保されているという点のみならず、本取組の実現性の面でも優れていると言えます。</p> <p>なお、今回の取組は図書館利用支援を中心とする企画になっており、学修支援面に関しては、まだ工夫・充実の余地が残されているとの印象を受けたので、今以上に組織的・体系的なデザインを持つものへと発展させることで、より他の大学等の参考となるような優れた取組になるものと思われれます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	東京薬科大学
プログラムの名称	人間知を育む相互交流プログラムの展開 －異世代や多様な価値観を包含する状況の創造－
プログラム担当者	土屋 明美
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本取組は、学生・教職員の人間知を結集し、地域に開かれた知の共同体である大学の構成員として、一人ひとりの学生を育てることを目的とする。</p> <p>人間形成の重要な時期を過ごす学生は、同世代との交流にとどまらず、人生のモデルともなる先輩や未知の可能性を秘めた子どもとの世代交流により将来展望を拓き、自らのアイデンティティを形成する。</p> <p>社会・文化・自然事象に関する問題意識の確立は学問の基礎であり、大学において基礎学力を保証し学習のつまづきを早期に解消する教育環境を整えることは必須である。教職員のFD・SD活動のメインテーマは、長期化した青年期を過ごしている学生理解と対応方法である。一方、青年期の悩みは人間的成長の契機ともなるものであり、自己理解・他者理解を仲間やカウンセラーと共に深め、自己表現する楽しさを体験した学生は思いやりのある人間として育ち、健康やいのちに関わる職業人としての土台作りともなる。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>東京薬科大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を具体的かつ組織的に実施しており、その結果は平成 18 年度の大学基準協会による評価において学生生活・支援について一定の評価を得ていること、ISO取得により環境保全・改善に向けての社会的ニーズに对应していること等で実証されるように、大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「人間知を育む相互交流プログラムの展開」の取組は、世帯交流、学び、地域交流、健康、研修・評価プロジェクトから構成され、それぞれの支援のプロセスが明確で評価体制も整備されており、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>特に、修学上や健康面で潜在的に問題を抱えている学生の早期発見・早期解決を目指していることに加えて、多様な人々との交流によって問題意識の確立、多様性、生きる力などの涵養を図る総合的な学生支援制度は、学生の主体的参加と体験を重視した全学的な取組であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	法政大学
プログラムの名称	「学生の力」を活かした学生支援体制の構築 ークラス・ゼミ（正課教育）、クラブ・サークル（正課外教育）に次ぐ、『第 3のコミュニティ』づくりー
プログラム担当者	安東 祐希
<p>（プログラムの概要）</p> <p>今日の学生の気質やニーズ、悩みの多様化に対応するため、現在学生部、学務部、キャリアセンター等、部局毎に提供している学生支援策について、部局横断・連携体制（仮称：法政大学ピアサポートコミュニティ／以下「PSC」）を構築する。PSC では学内インターンシップの形式で学生スタッフを運営の柱として採用し、大学／学生の協働体制で支援策の企画・実施にあたる。部局の横断連携により学生の成長段階に合わせた柔軟かつ多面的な支援策を、また学生の視点を持つ学生スタッフの採用により学生の立場に立った実効的な支援策を提供できる。さらに、学生同士が悩みを共有し助け合うという仕組みを通じ、学生が社会に羽ばたく上で最低限必要な社会性を得るという副次的効果も期待できる。基本コンセプトは「“クラス・ゼミ”、“部・サークル”に次ぐ第3のコミュニティ」である。</p>	
<p>（選定理由）</p> <p>法政大学においては、修学支援・学生相談室・就職支援・奨学金制度・課外活動支援・課外教養プログラム・学生生活支援・障害学生に対する支援等について、大規模大学の特性を生かしながら、明確な目標を持って取り組まれています。新入生合宿及びオープンキャンパスへの学生スタッフの参画、キャリアセンターにおける学生アドバイザーの設置、学内環境のための学生監査員の採用など、学生の力が大学コミュニティーの維持・発展に活かされています。</p> <p>また、現代生活に必要であるにも関わらず正課からは抜け落ちていて課外活動でも行われていない課題を、学生主体の「課外教養プログラム」として取り上げ、支援している点も評価できます。</p> <p>本取組では、学生から寄せられる要望や悩み等のうち、単独部局では対応の難しいもの、あるいは複数部局で対応した方が良いものを取り上げて「法政大学ピアサポートコミュニティー」で支援しようとしています。これまでの実績を基盤として次の発展を図る優れた取組であり、他の大学等の参考となるものと言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	明治大学
プログラムの名称	学生部による社会人基礎力形成支援の新展開 －圧倒的多数の中間層を対象とした M-Navi プログラム－
プログラム担当者	柳澤 敏勝
<p>(プログラムの概要)</p> <p>明治大学では、修学支援、健康支援、経済支援、就職・キャリア支援など、さまざまな側面から学生支援を行ってきた。また、学生生活に不適応が見られる学生に対しては、相談・メンタル支援に努めてきたが、本取組では、そうした従来の各種支援の対象外に存在する圧倒的多数の中間層の学生に焦点をあてて、いわゆる社会人基礎力の形成支援の強化を目指す。すでに本学では学生部を中心に、そうした視点より、多様な体験型正課外教育プログラム（M-Navi プログラム）を実施してきている。それをさらに発展させて、本取組では、(1) プログラム参加学生と学内の起業グループ学生との連携の構築、(2) プログラム参加学生による各種プログラム・コンテンツ化委員会の組織化、(3) 学生による情報発信（DVD 化）とプレゼンテーション（報告会）を踏まえたプログラムの共有化と再構築、以上 3 点を実施して学生参加型の社会人基礎力の形成支援を新たに展開する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>明治大学においては、学生支援に関する明確な理念の下、長年にわたり、組織的で総合的な学生支援に取り組んでおり、その結果は、修学支援、経済支援、相談・メンタル支援などにおいて実証されるように成果を上げていると言えます。</p> <p>今回申請のあった体験型正課外教育プログラム（M-N a v i プログラム）を活用した「学生部による社会人基礎力形成支援の新展開」の取組は、従来の各種支援では見過ごされてきた中間層の学生をも支援の対象とし、学生参加による支援のプロセスが明確であり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>特に、M-N a v i プログラムのデジタルコンテンツ作成や発表会は、学生同士の学びあい効果や参加していない学生への波及効果が期待される取組であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	早稲田大学
プログラムの名称	異文化共生社会で生きる力を養う実践活動 －国際感覚と現場感覚を兼ね備えたグローバル・リーダーの養成－
プログラム担当者	島田 陽一
<p>(プログラムの概要)</p> <p>2,300 人を超える私学最多の外国人留学生数を誇る本学特有の、国際性豊かで多様性に富んだ環境を活かし、学生がこれからの「異文化共生社会」で生きる力を育むため、日本人学生と留学生が寮生活や課外活動などの非定型の学習の場で協働しながら切磋琢磨する過程で、互いに育み合い、人間的成熟を遂げていくことのできるプログラムを提供する。</p> <p>具体的には、日本人学生と留学生の異文化共生（混住）型の学寮における独自の全人教育プログラム、地域の教育現場におけるアウトリーチな国際理解促進活動、地方や海外のフィールドワークの現場における世代や文化的背景の異なる人々との協働体験などである。</p> <p>学生同士の協働の過程で、国際感覚や国際的知見の涵養、異文化適応能力や異文化環境におけるリーダーシップの育成、新たな社会認識への目覚めなどが促され、将来、異文化共生社会を逞しく生きることのできるグローバル・リーダーたり得る人財を養成する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>国際社会における我が国の重要性が益々高まる状況下で、早稲田大学においては 2,300 人を超える外国人留学生の教育・学生支援は重要な課題ですが、日本人と外国人留学生が寮生活や課外活動を通じて異文化共生社会で生きる力を育むことに貴学が積極的に取り組もうとする意欲を、申請書から十分に感じ取ることができます。</p> <p>今回申請のあった「異文化共生社会で生きる力を養う実践活動」の取組は、日本人学生と外国人留学生が異文化共生（混住）型の学寮における生活を通して、また、地域教育現場における文化的背景の異なる人々との協働体験をすることにより、異文化に対する理解をより一層深めさせていこうという意欲的な、しかも貴学の現在までの学生支援実績の基盤に立脚した実現性の高い取組であると評価されます。多人数の外国人留学生の個々の性格の違いにより、本取組を遂行する上で困難な点が発生し得ることもありますが、現在までの学生支援実績を基に、そのような事例の対処法等にも工夫されることと思料され、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	関東学院大学
プログラムの名称	校訓に基づく入学前～卒業後までの総合支援 －校訓：「人になれ 奉仕せよ」－
プログラム担当者	吉原 高志
<p>(プログラムの概要)</p> <p>3年前に開設された学生支援室では、「人になれ 奉仕せよ」(校訓)、「学生本位の大学づくり」(学長方針)および「受・敬・共・信・誠の考え」に基づいて、教職員(先輩学生や非常勤スタッフも含む)が、学内・学外における学生生活および学習活動を支援してきた。その内容は、メンタルヘルス相談を含む生活相談・支援、特に聴覚障がい学生の支援および修学支援(主として基礎的科目の補完)である。</p> <p>この成果を基にして、支援内容を発展させ、さらに充実したキャンパスライフを学生に提供するために、現代社会的ニーズや在学生ニーズを的確に計り、在学生はもちろんのこと、入学前から卒業後までの支援を念頭において検討した。その結果、①リメディアル用教材開発②「何でもセミナー」(仮称)の実施③メンター養成④障がいを持った学生の対応に関する講習⑤電子学生カルテと⑥生涯メールアドレスの利用などについて、新たに特色ある取組として実施する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>関東学院大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を3年以上にわたり、具体的かつ組織的に実施しており、その結果は、メンタルヘルス相談を含む生活相談・支援、特に聴覚障害学生の支援及び修学支援において実証されるように大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあったリメディアル用教材開発及び「何でもセミナー」の実施の取組は、悩みの対象が明確となっている学生への支援、並びに成績不振や授業に欠席が多い学生への支援に関し、緊急避難的な対応から抜本的な解決に導くまで、それぞれの支援のプロセスが明確であり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>特に、メンター養成の取組にあっては、当該学生が潜在的に問題を抱えているとの想定に立って対応し、早期発見・早期解決を目指す取組であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	名古屋学院大学
プログラムの名称	自分発見型学生支援ネットの構築に向けて －「キャリアデザイン」をプラットフォームとした新たな展開－
プログラム担当者	三井 哲
<p>(プログラムの概要)</p> <p>キャリア形成支援からみると、いまの大学では、将来に明確な意識をもつ早熟な（意欲のある）学生とそうでない未成熟な（意欲の弱い）学生のあいだの“二極化”が進んでいることが、学生のニーズに応じたより効果的な「学生支援」を提供するうえで大きな課題となっている。そこで、本学は、実績のある「キャリアデザイン」と全学的なコミュニケーション支援システムを駆使することで自分発見する多様な学生のためのプラットフォームをつくり、学生が自分を知り、自分の将来に向けた課題に向き合おうとする場と機会に必要な支援やケアを提供する“自分発見型”学生支援ネットの構築をめざす。その一方、現代の学生をこうした自分発見に導くには「ケア重視」の支援が必要であり、本学のよき伝統を生かしながら学生サポートの充実をはかる。これによって、本学は、移行期の若者を高い人間力と明確な将来志向をもった人材に育成するという社会的要請に応えたい。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>名古屋学院大学においては、学生支援に対して明確な理念と目標を持ち、キャンパスコミュニケーションシステム（CCS）の導入やキリスト教センターを介した学生サポートを通して、学生支援を積極的に展開しており、十分な成果を上げていると言えます。</p> <p>今回申請のあった「自分発見型学生支援ネットの構築に向けて」の取組は、これまでの取組の上に、早熟な学生に対する支援も視野に入れ、ケアという視点も組み込んで自分発見をサポートする、すべての学生を対象とした大学全体の取組として評価できます。また、この取組は基本的にはキャリア支援ですが、動機や背景は明確で、趣旨・目的は十分意義があり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>特に、「早熟」「未成熟」と二極化した学生を対象として多層的に行おうとしている点において新規性があり、これを支える組織体制やCCSの上に有効に機能することが期待され、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	同志社大学
プログラムの名称	地域コミュニティによる学生支援方策 －京町家を拠点にした異世代協同プロジェクト－
プログラム担当者	西村 卓
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学今出川校地の所在する「京都市上京区」は、有形無形の歴史的・文化的財産に加えて、町内会の自治等、伝統的に強い地域力を有している。その特性を活かし、地域ぐるみで多様な感性の行き交う「学生支援」を行なう。学生と市民が運営する町家では、「子ども」「学生」「大人」「高齢者」が出入りし、世代混合のサークル活動や議論の場が展開される他、学生が「異世代と協同」しながら、「歴史・文化・伝統産業」等の地域財産を発掘し、現代の生活の中に継承していくことに関わる文化プロジェクトを展開していく。また、学生が地域コミュニティの住人として町家で生活することによって、生活上のルールや風習やしきたり等を学び、共に実践していく。「歴史文化の担い手」としての自己や「社会の構成員」としての自分の役割を意識することに繋がる「地域教育」の中で、現代の学生が実社会に出て行くために必要な「ライフスキル」の獲得を促進する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>本取組は、町家というキャンパスの地の利を活用した京都ならではの取組であり、歴史的な蓄積のある伝統的空間の中で、様々な立場や異年齢の人々との協同・交流を行うことで人間力をつけさせるという興味深い活動で、意欲的な学生を育てるサークル活動に対する効果的な支援策です。</p> <p>特に、学生の自主性の育成のための計画が細部まで十分に綿密に検討され準備されていること、また、今後は授業・演習など全員参加型での活用についても計画可能であることなどの点を考慮すれば、大学集積地、文化の中心地といったキャンパス立地というメリットを持たない他の地域の大学でもそうした工夫を通して参考となる要素を発見することが可能な取組であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	佛教大学
プログラムの名称	「縁」コミュニティによる離脱者ゼロ計画 －適度な距離感を保った学生の共同体作りと就学支援セーフティネットの構築－
プログラム担当者	田中 典彦
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本取組は、入学者全員の卒業を目指す「離脱者ゼロ」プログラムである。そのために、同級生との「ヨコ」関係、上・下級生との「タテ」関係、さらに教職員との「立場」関係を柔軟に組み合わせた「縁（えにし）コミュニティ」を作る。この共同体は、現実に関わりあわせて集う場やインターネットを活用したバーチャルな場を利用することができ、適度な距離感のつながりがセーフティネットとなって孤立化を防ぎ、挑戦への支えとなる。</p> <p>また、「ミッションプログラム」を開講して本学で学ぶ意義や使命を伝え、学生として、また社会の一員としての自覚、主体的な学びへの自覚を促す。またそれは、学年の進行にともなう系統的なカリキュラムと連動していく。</p> <p>加えて、卒業生も巻き込んだ学びの共同体は、学生、卒業生の両者にとって、キャリア形成の場となる。</p> <p>もって本取組より、自らの力で大学や社会との「つながり」や「つながる力」が養成されるのである。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>佛教大学においては、教職員連携の下、組織的かつ具体的に学生支援が実施されており、その成果は、「学生の人間力を育む福祉実習教育の開発」や「公立学校を起点とする小大連携プロジェクト」などにおいて実証されるように大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった『「縁」コミュニティによる離脱者ゼロ計画－適度な距離感を保った学生の共同体作りと修学支援セーフティネットの構築－』の取組は、社会的ニーズにあった時宜を得たものであり、その方法も、リアルとバーチャルを併用し、また、カリキュラムにおいても「ミッションプログラム科目群」を開講するなど、構想計画に無理がなく実現性の高いものとなっています。中でも、「卒業生も巻き込んだ学びの共同体」作りは、今後の学生支援の在り方に一石を投じる提案であり、その成果が大いに期待されることです。</p> <p>以上のことから、貴学の取組は、学生一人一人が多様な関わりの中で多様な支援を受けられる取組であり、他の大学等の参考となる優れたものであると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	関西大学
プログラムの名称	広がれ！学生自立型ピア・コミュニティ －関西大学で育む 21 世紀型学生気質－
プログラム担当者	芝井 敬司
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学生支援プログラムは、関西大学の学生が豊かな人間力(21世紀型関西大学学生気質)を備えることで、本学独自の、知徳体を融合する学生文化(学生が主体性をもって構築する大学環境)を育み、卒業後に21世紀の知識基盤社会を支える人材として活躍するために必要な「社会人基礎力」を修得することを目的とする。平成20年度から実施する「全学共通教育改革」と連動して、新規にピア・サポータ養成講座(各種サポートに関する知識を習得し、その実践に必要なコミュニケーション能力を育成するもの)を全学生に提供することで、学生たちの「意識(徳)」を新たにして、「正課教育」「課外活動」「資格取得」等多様な学びによって習得した「専門的知識や技術(知)」に基づいて、本学に必要な「ピア・サポート」を自ら考え企画し「実践(体)」する「学生総ピア・サポータ体制」を確立し、「ピア・コミュニティ」の創出を目指す取組である。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>関西大学においては、学生支援に対する理念や目標、現在の取組の組織性、社会的ニーズや学生のニーズへの対応の現状、教職員の資質向上、現在の取組の実施後の評価及び取組内容の改善などを着実に実施されています。昭和30年から組織的に実施されている「学生生活実態調査」、企業からの評価である「役に立つ大学2008年版大学ランキング」の順位や偏差値、平成18年度の文部科学省・現代GPの採択等は、関西大学の取組の実際や成果として、特筆すべき点と言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「広がれ！学生自立型ピア・コミュニティ－関西大学で育む21世紀型学生気質－」の取組は、学生がピア・サポート体制を創出し、社会人基礎力を習得する点に、関西大学の独自性が認められ、高く評価されます。本取組は、平成20年から実施する「全学共通教育改革(正課教育)」と連動したものとなっており、全学生を巻き込んだ大きな構想であり、注目すべき取組であると言えます。</p> <p>特に、独自に展開されるプロセス重視型評価は期待するところが大きく、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。新たな取組の実施計画は具体的で、人員配置を含む組織計画も整っており、発展の可能性があると判断します。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	プール学院大学
プログラムの名称	発達障害を有する学生に対する支援活動 －大学における特別支援教育の取組－
プログラム担当者	森定 玲子
<p>(プログラムの概要)</p> <p>18 歳人口の減少の影響で、各大学とも定員数確保のために A0 入試や推薦入試など、受験生に学力試験を課さない入試が増加し、その結果、資質、能力、知識の異なる学生が大学に入学するようになってきた。本学でも入学者の 5 割以上が A0 入試や推薦入試によるものである。選考時に面接を行っているが、受験生一人ひとりの資質を十分に把握することができず、入学後発達障害を疑われる学生が近年増加し、今日では学生の 1 割程度が発達障害を有していると推測されている。発達障害を有する学生は、学習や対人関係、進路選択において課題を抱えており、なんらかのサポートがなされないまま放置されると、留年や退学、進路先未定の状態での卒業に繋がっていくおそれがある。そこで、本プログラムは、発達障害を有する学生を対象に、個別の教育支援計画を策定し、学習支援、ソーシャル・スキル・トレーニング、キャリア教育を総合的に行っていこうとするものである。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>プール学院大学においては、障害のある学生を組織的に支援する体制を整え、FD や SD を通して障害のある学生への対応について前向きに取り組んでおり、入試や授業において委員会を通して学生支援を実施してきた実績が高く評価されます。</p> <p>今回申請のあった「発達障害を有する学生、個別の教育支援計画、学習支援」の取組は、これまで我が国で取り組まれてこなかった大学レベルでの発達障害のある学生への特別支援教育を計画的に取り組むことが予定されており、他の大学等の参考となる新しい取組と言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	畿央大学
プログラムの名称	健康で規則正しい生活が勉強する学生を創る －健康・運動・栄養・生活リズムを学び、創出する自律型学生支援プログラム－
プログラム担当者	渡辺 幸重
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学は「健康と教育」の分野で人間性豊かな専門職業人の養成を行っている。近年、夜更かしをしたり朝食をとらない若者が増え、生活のリズムの乱れが学業に影響するケースがみられる。この問題は、本学健康科学部が教育研究の対象とする健康・運動・栄養の分野にわたっており、また学校教育でも子どもの不規則な生活が問題視されていることから、教育学部にとっても強い関連性がある。そこで、学生が自分自身の健康や食事（栄養）、身体機能（運動）、生活のリズムを客観的データとして把握・分析し、あるべき生活の姿を追究できる環境を全学的に整備することで、規則的で健康的な生活を確認し、将来活躍する専門分野および関連分野に関する知識や姿勢を身をもって学べるよう、本学の学生支援機能を充実させる。それを保証するシステムが「畿央大学総合支援システム KiTss」であり、その一環として、「健康支援システム」を構築する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>畿央大学においては、「畿央大学総合支援システム K i T s s 」により、社会ニーズや学生のニーズに基づき、大学全体として一元的な管理の下に学生支援に取り組んでいます。しかし、大学新設から間もないこともあり、学生支援に関わる教職員の研修や評価体制に不十分な部分がまだあり、学生支援の基本的な取組に不十分な点も認められます。</p> <p>しかしながら、今回申請のあった「健康で規則正しい生活が勉強する学生を創る」の取組は、健康・運動・栄養・生活リズムに基づき、大学全体として総合的な構想の下で学生支援が行われていることがうかがえます。本取組はその一部がすでに健康科学部及び教育学部の各学科の教育内容として実施されているところから、学生支援上のプロジェクトという以上に、学科の教育課程に直結した教育支援プロジェクトの趣が強いとも言えますが、そのことが本取組の意義や内容を損なうものではないと考えます。</p> <p>学生の健康面や身体機能・食事・生活パターンなどの情報を総合支援システムにより一元的に管理することは、学生が潜在的に抱えている問題を早期に発見し、早期に解決することに役立つものと考えられます。大学の規模等の条件により、本取組がそのまま他の大学等の参考となるとは言い切れませんが、特定の学生たちに限定されるにせよ、有効性のある優れた取組であると評価できます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	広島工業大学
プログラムの名称	技術系女子学生の継続的なキャリアデザイン ーライフサイクルを視野に入れた支援プログラムの構築ー
プログラム担当者	宮崎 祐助
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本取組は、技術系女子学生のキャリア形成・就業支援から卒業後の再チャレンジ支援まで、女性技術者としてのライフサイクルを視野に入れた継続的な支援プログラムを構築するものです。</p> <p>本学女子学生キャリアデザインセンター（JCD センター）を中心に以下の事業を展開し、女性技術者としての意識とスキルを高めます。</p> <p>①キャリア形成支援 JCD センター学生の自主企画による市民や企業人とのものづくり交流や合宿セミナーなどを実施し、女性技術者としての素養を育成</p> <p>②就業支援 女子学生の潜在能力を顕在化させた進路指導と女性技術者特別教育プログラムの構築実践、「女性技術者のための望ましい就業環境」の企業への提案</p> <p>③再チャレンジ支援 結婚出産などで離職を余儀なくされた卒業生の再チャレンジを支援するための人材バンク、スキル教育プログラムの構築</p> <p>④技術系大学に学ぶ女子学生用の特別教育プログラムの開発・試行・評価及び正課教育への展開</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>広島工業大学においては、学生支援に関する目標に基づき、女子学生就職率の過去の推移（全国平均×本学平均）を捉えながら、入学後のモチベーションの低下に対する改善を目指しており、女子学生キャリアデザインセンター等での成果が見られます。</p> <p>今回申請のあった「技術系女子学生の継続的なキャリアデザイン」の取組は、就職率を上げ、また、早期離職を防止し、卒業後の再チャレンジ支援に取り組むものですが、</p> <p>特に、女性技術者を受け入れる社会環境の構築を導くまで、それぞれ支援のプロセスが明確であり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。特に、女子学生支援拠点として、女子学生キャリアデザインセンターの創設と実質化を図る取組にあつては、当該学生が潜在的にキャリア形成上問題を抱えているとの想定に立って対応しているとともに、継続的なプログラムを立案していることは、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	立命館アジア太平洋大学
プログラムの名称	<p>学生による若者と社会のための自主活動支援 ー学生による学生のための学生活動インキュベーションセンターの設立ー</p>
プログラム担当者	中野 雅博
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学では、「自由・平和・ヒューマニズム」「国際相互理解」「アジア太平洋の未来創造」という基本理念として 2000 年 4 月に開学した。多様化する現代社会において問題を発見し解決する能力をもち、グローバル社会でリーダーシップを発揮できる人材の育成を目指し、有為の人材を送り出し、また優れた学生の自主的活動を生み出している。</p> <p>本取組は、その成果の上に立ち、経験をいかすものとして現代社会の問題に対し、正課外活動の側からの新しい貢献モデルを示す。自主的活動から選ばれる優れた学生活動はグッド・プラクティスとし広く社会に公表される。そのような成功体験モデルを学生同士でインキュベートする「学生活動インキュベーションセンター」構想を示し、学生の意図と社会のニーズを積極的にマッチングするセンターの設立を提起する。そして、それを基盤として現代の若者や社会が抱える問題への解決方法を発見し、実践する学生を育成するための試みである。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>立命館アジア太平洋大学においては、異文化間の国際相互の中でリーダーとして活躍できる創造性豊かな人材育成を目標に、支援活動を正課活動と正課外活動に位置づけ、学生を主体とした自主的正課外活動においても、教員と学生との連携の中で、国際学生サミットの開催や地域ボランティアへの参加など学生と地域との交流の成果が認められます。</p> <p>今回の取組における、学生が主体となるインキュベーションセンター設立及び 4 つの支援機能（援・報・調・育）の取組は独自性が認められ、学生主体の運営・管理システムとして期待・評価できます。センターの設立によって、学生活動のニーズ調査や活動支援をさらに推進し、学生が育つ仕組みを整え、最終的に活動事例集の作成を目標にしています。</p> <p>本取組は学生の主体性に任せることを意図しているため、有意義な活動がどの程度出てくるか、あるいはそのような活動が出てくるように大学が学生をどの程度効果的に導くことができるか現時点では不明ですが、貴学は、すでにいくつかの教育支援プログラムに採択され、それらを実施した実績もあり、それを実現させることができる意欲があると思われれます。</p> <p>今回の取組の着想の新規性、有効性、実施の組織性等は、高く評価でき、その成果も期待できるものと判断します。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	沖縄大学
プログラムの名称	学びあい・支えあいの地域教育の拠点の創生 —地域ぐるみで「共創力」を育む学生支援—
プログラム担当者	山門 健一
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学は「地域に根ざす」ことを基本理念とし、「競争力（知識量）よりも共創力（参画意欲）」との教育方針に基づき、2000 名程度の多様な学生が在籍している。しかし沖縄の状況を反映して、中途退学率が高く、学生支援のニーズが極めて高い。そこで本学の小さな規模を活かし、教職員と学生が共創して「学生ユイマール」（相互扶助）の場を広げ、学生たちが「学びあい」「支えあい」を実現する「地域教育モデル」を確立したい。「地域教育力再生」という社会的ニーズにも応えるために、多様なピアサポート制度を活用した学生参加型の「地域教育」を実践してゆく。「大学教育」も「地域教育」の一環であると位置づけ、学生同士が学びあい、支えあう共創活動をキャンパスの内外で展開し、沖縄本島南部を中心とする地域全体をキャンパスの場とする構想である。「地域教育センター」の新設によって、地域ぐるみで「共創力」を育む学生支援を実践することを試みる。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>沖縄大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を近年、実際的かつ組織的に実施しており、その結果は学生生活支援室の設置や奨学金支給学生の増大、障害学生支援において実証されるように成果を上げていると言えます。</p> <p>今回申請のあった「学びあい・支えあいの地域教育の拠点の創生 —地域ぐるみで『共創力』を育む学生支援—」の取組は、沖縄という地域事情に照らして基礎学力の低い学生、就職意識の薄い学生、中途退学したり、卒業後に地元で無業者となる可能性を秘めている学生への支援に関して、「学生の学生による学生のための支援」とうたわれているように学生の参画を得て、全学的に組織的裏づけをもって実施しようとするもので、効果が期待される意欲的な取組であると言えます。</p> <p>とりわけ、本取組の実施に当たって、個々の取組の要素の一つ一つを見れば新規性に富むとは言えなくとも、総合的に見て、地域のニーズを踏まえて、地域資源とのつながりを最大限に活用しつつ必要な要素を盛りこんでいる点や、評価に当たっても学生による評価委員会を構成するという点など、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	北海道自動車短期大学
プログラムの名称	基礎学力習熟のための支援システムの構築 －自動車整備士資格の取得支援システムを例として－
プログラム担当者	加賀田 誠
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学では2級自動車整備士の養成教育を行っている。基礎学力が劣る学生には個人指導に近い教育を行って、教員の努力を傾注し、卒業直後に受験する二級自動車整備士の国家試験の高い合格率を維持してきた。しかし今後、能力・意欲の低い学生が増え続けることが予想され、教員の努力だけでは指導が立ち行かなくなる危険性がある。本プログラムでは、我々の指導ノウハウとe-learningシステムとを結びつけ、教員の仕事の一部をコンピュータシステムが肩代わりし、現行同様あるいはそれ以上の効果をもつ資格取得支援システムの構築を目指す。現行のCAI(Computer aided Instruction)の機能を強化し、学生の解答傾向の分析から、個々の学生の不得意とする問題の把握をし、きめ細かく弱点を分析する。その結果を教員へフィードバックして、入学時からの教育方法の工夫に反映させる。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>北海道自動車短期大学においては、学生支援の中心課題を就職と直結する二級自動車整備士資格取得と定め、基本的授業のクラス担任による実施や数学授業の習熟度別編成など個別指導充実の工夫を重ねた結果、平成15、16年度の整備士試験合格率60%程度から平成17、18年度は99%に上昇させることに成功しました。これは全学教職員の協力あつての実績と評価できます。</p> <p>今回申請のあつた取組は、個別指導を一層充実するため、高度なコンピュータ支援学習システムCAIを導入し、①基礎学力の定着、②整備士試験問題練習、③自動車工学各分野の学習プロセスの診断などを図ろうとしたものです。現在、すでに貴学は原始的なCAIシステムを運用して効果を上げていますが、さらに学生個人に適応した教材提示と苦手領域分析を可能にしようとする計画であり、コンピュータ利用の十分な経験を前提とした現実的な取組と言えます。</p> <p>特に、教員による個別指導の成功実績を基礎として、さらにCAIの特性を生かした指導を加える点は、教員の手抜きのために指導をコンピュータに丸投げする企画とは根本的に状況が異なっており、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	聖徳大学短期大学部
プログラムの名称	All For One をめざす学生支援活動 －全教職員によるインターカー・サポート－
プログラム担当者	野原 八千代
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学保育科の学生支援は、設立時よりクラス担任と学生部が学生支援の担い手となってきた。以前よりきめ細かい学生支援を行なってきたが、近年、学生生活満足度は低下傾向にある。そのため、学生支援の方法を見直す必要が出てきた。</p> <p>また、最近の学生からの相談内容は、学科の適性、短大生活の問題、人間関係、家族関係、就職・進学の問題など多岐にわたる。カウンセリングを受ける学生の心の問題の背景には精神的未発達などもあり、支援には各部署との連携は欠かせない。また、貧血なども多く女性健康支援の体制も充実させる必要がある。</p> <p>今年度より、全教職員が正しい情報、知識を共有し対応することを目的とし、新たに学生サポート推進委員会を設置した。今後の学生支援には、全教職員がインターカーとなり学生一人ひとりに対応し、必要に応じチームを組んで支援する All For One のサポートシステム、その窓口の「よろず相談コーナー」が大きな力となる。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>聖徳大学短期大学部の学生支援は、学長のリーダーシップの下で、クラス担任教員を中心に、学生課、教務課、キャリア支援室等の各部門が有機的に連絡をとりながら組織的に実施されています。学生のニーズは各種のアンケートや満足度調査・基礎ゼミ等を通して組織的に把握され、FD・SD や評価内容のフィードバックにおいても、適切に実施され大きな成果を上げています。</p> <p>今回申請のあった取組は、すべての教員が学生にとっての1次的な相談者（インターカー）となり得るような研修（講習会）を順次実施すること、及び相談業務を随時実施できるような場所「よろず相談コーナー」を学内に設置し、当番の教員を常駐させることを中心に、これらと従来の組織とを有機的に連携させるなど、他の大学等の参考となる優れた取組と言えます。</p> <p>インターカー講習の内容の充実、インターカー技能及び取組全体の評価を適切に実施することなどにより、悩みを持った学生にとって、より有効な取組となることを期待します。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	千葉経済大学短期大学部
プログラムの名称	キャリアデザインをコアとする修学支援策 －自分の夢の実現をめざして－
プログラム担当者	飯名 皓作
<p>(プログラムの概要)</p> <p>ビジネスライフ学科では、自らの進路に応じて自由に科目選択が出来る7つのフィールドからメインフィールドを選ばせている。しかし昨今では「自分は将来何になったらいいのだろうか」と悩む学生が増えている。そこで1年次の全員にキャリアデザイン科目を履修させ、自分の夢(キャリアゴール)を見つける方法を探させる。また同時に全員を少人数のクラスに編成し、大学教育を受けるための基礎的技術とビジネス知識やモラルの修養を目的とする基礎ゼミを履修させている。さらにPCを使用する日本語の文章表現法を履修させている。自分の夢を見つける方法に自信を深めた学生には、卒業要件に入っているインターンシップを履修するよう指導している。</p> <p>1年次後期から始まる就職活動にあわせて、キャリアデザインでビジネスマナーの講習も行う。また、本学科を巣立った彼らは、果たして自分の夢と合致した道に進んでいるかを卒業生を対象に検証する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>千葉経済大学短期大学部では、キャリアデザインをコアとする学生修学支援という目標を設定し、この取組の充実のために、かなり具体的に、また組織的に実施しようとしており、キャリアデザインを通して学生自らが夢を実現していく道が、すでに「わかった」という実感を持って探せるようになっている状況に象徴されるように、大きな成果が期待できると思われます。</p> <p>今回の取組は、そのプロセスが理論的に、また、具体的に明確であり、そこにはかなりの工夫があると言えます。</p> <p>特に、今後のキャリアデザインを充実させるために、現代の若者の弱点であるビジネスマナーの習得に力点を置く本取組は、当該学生がこの点において潜在的に問題を抱えているという認識から出てきたものであり、これに対して早期解決を目指して積極的に取り組もうとしており、他の大学等に対しても改善の勇気を与えてくれる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	湘北短期大学
プログラムの名称	学生の主体的活動を誘発する支援環境の構築
プログラム担当者	黒崎 真由美
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学では「社会に役立つ人材の育成」という建学の理念に沿って、多様な学生支援を行っている。その中で本取組は、学生の主体的活動を誘発し支援するためのもので、時間・空間の確保、成果の情報発信、ファシリテーターの育成という3つの施策を柱としている。学生を授業という枠で縛るのではなく、また全く学生の自由に任せるのでもなく、教職員が学生にヒントやアドバイスを与えるファシリテーターとして機能することにより、学生が自ら活動を通して学ぶことを援ける。この主体的活動により、学生はコミュニケーション能力、企画力、実行力、協調性など、社会的ニーズに沿った資質を身に付けることができる。この取組は、従来の授業を中心とする教育から学生の主体的活動を通じて学ばせる教育に向けて、教育環境や教職員の資質を変化させていくことを狙うもので、評価基準の明確化、ファシリテーション能力開発のためのFD活動なども包含している。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>本取組は、「意欲」を持たせ、充実した短大生活を過ごし、社会に出て積極的に活躍できる人材の育成を目指すための学生支援プログラムとして、優れた取組です。これまで行われてきた正課外活動を総合的に捉え、それを推進するための具体的な手立て（正課外活動のための時間や場所の確保、情報発信、この活動に積極的に関わる教職員の能力の育成）が工夫されており、いずれも実行されれば、教育効果が上がると予測されます。その意味で他の大学等の模範となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	富山短期大学
プログラムの名称	地域をキャンパスとした人間力向上の取組 －学科の特性を生かした社会参加活動の開発・支援－
プログラム担当者	武藤 憲夫
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本取組は、地域における社会参加活動を通して、学生の人間力の向上を図り、一人ひとりの「未来計画の実現」を支援するために、学習支援・課外活動支援・進路支援を一体的に位置づけ、全学的な体制で展開する学生支援の取組である。</p> <p>学内に「ボランティア・地域活動センター」を設置し、①特色ある地域活動プログラムの開発、②学生の地域活動への参加促進、③「Web ボランティア手帳」システムの開発・活用、④地域の諸団体との協働・ネットワークづくり等を推進する。</p> <p>学生は、学科ごとの学びの特性を生かした地域活動に参加・体験する中で、他者理解と自己理解を深め、自立と共生など現代に生きる者として必要な「人間力」を養うことにつながる。</p> <p>今回の取組は、平成 15 年度採択の本学特色 GP（一貫した福祉人材養成教育）と相俟って、地域との協働の中で「全人的な人間の育成」の双璧を成すものである。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>富山短期大学においては、学生支援に関する理念・目標に基づき、学生支援の取組を教職員及び各委員会が連携・連動して具体的かつ組織的に実施しており、その結果は、就職決定率の高さにおいて実証されるように大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「地域をキャンパスとした人間力向上の取組」は、地域とのネットワークを構築し、各学科の特性を生かした活動プログラムにより、対人関係やコミュニケーション能力を実践的・効果的に学ぶための支援のプロセスが明確であり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>特に、学内に「ボランティア・地域活動センター」を設置し、地域活動のプログラム開発からはじまり、Web ボランティア手帳を活用することにより学生の参加実績や感想・疑問等を早期に確認、早期に指導できるシステムになっており、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	山梨学院短期大学
プログラムの名称	短期大学を拠点とした長期的自立支援の取組 －児童養護施設出身者への卒業後支援を含めて－
プログラム担当者	田邊 幸洋
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学は40年来、児童養護施設入所児童へ高等教育の機会を提供しつづけ、「自立援助奨学金制度」の確立をみた。しかし、在学中のみの支援の限界、職場再適応指導や生活保障の充実、学生のプライバシー保持への配慮等の課題もみられる。</p> <p>本取組では、本学入学前から卒業後の自立に至る長期的支援の構築を目的として、①入学前支援：施設との連携による進学希望者の発掘と生活管理能力向上の指導 ②在学中支援：居住環境と生活資金に関する経済的支援、当該学生への就職指導の充実と就職先開拓に関する就職支援、及び各部署・教職員との連携や個別支援の担い手となる担当者の配置や面談スペースの設置等に関する心理的支援 ③卒業後の継続支援：30歳までを目安とした経済的支援・就職支援・心理的支援の継続を実施する。</p> <p>基本的な生活習慣や自尊感情を得難い境遇にあった青少年が青年期の自立を追求する支援は、新たな高等教育の可能性への道であると考えます。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>山梨学院短期大学においては、学生支援に関する目標に基づき、学生支援の取組を40年以上にわたり、具体的かつ組織的に実施しており、その結果は「山梨学院学生総合支援委員会」、「山梨学院私費外国人留学生奨学金」「山梨学院短期大学自立援助奨学金」などの制度において、大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「短期大学を拠点とした長期的自立支援の取組－児童養護施設出身者への卒業後支援を含めて－」は、いわゆる「施設の子」として高等教育を受けにくい状況下にある学生に対する在学中の経済的支援、心理的支援、就職支援に留まらず卒業後の経済的支援、就職支援、心理的支援までを行う取組で、教育的支援と福祉的支援の一体化が具現化されており、他に見られない工夫ある取組であると言えます。支援対象年齢を30歳までとしていることに若干危惧する点はありますが、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	名古屋短期大学
プログラムの名称	学生生活支援の有機的連携のための基盤整備 －キャリア・コンサルティング・サポート・システムの構築－
プログラム担当者	茶谷 淳一
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学では学生一人ひとりの人間力向上と将来を自ら切り開く力を養うことを目的として豊かな学生生活の創造を支援する活動(「キャリア・コンサルティング」)が複数の組織によって展開されている。「学生生活支援の有機的連携のための基盤整備～キャリア・コンサルティング・サポート・システムの構築」は、学生生活に関する情報をデータベース化し共有することによって学生支援の体系化を促すとともに、より新鮮かつ多様な情報にもとづいて、より学生のニーズにあったコンサルティングを創造的、主体的、かつ有機的に連携し合いながら、各教職員が実現できるようサポートすることを目的とした基盤整備の取組である。本学の学生生活支援のノウハウをそのまま活用できるほか、特に情報を効率的に活用した系統的、効果的な面談が可能となる。学生支援の経験や教訓も蓄積できるため、教職員がノウハウを共有することで改善・継承を容易にする効果も期待できる。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>名古屋短期大学の申請書は、学生支援の説明が具体的でかつ組織的に行われている現状が良く理解できるものでした。何よりも教員・職員・学生が大学の構成員として対等に向き合っている点に好感が持てました。こうした取組の結果が、学生大会の出席者数の多さや、学生サークルの加入率の高さなどに表れ、学生が大学に強い帰属意識を持っていることがうかがえました。</p> <p>また、今回申請のあった「学生生活支援の有機的連携のための基盤整備 ーキャリア・コンサルティング・サポート・システムの構築ー」の取組は、「面談」等によりこれまで、あるいはこれから得られる学生支援に関する情報をデータベース化し共有することにより、体系的で効果的な学生支援をサポートすることを目的とした取組であり、高い効果が期待されます。</p> <p>申請書に指摘されているように、団塊世代のベテラン教職員の大量定年時代を迎える今日、残る教職員にこれまでの優れた学生支援のノウハウを継承し、今後も組織的・体系的に効果のある学生支援を行っていく上で、この取組は他の大学等の参考となる優れた内容と言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	京都外国語短期大学
プログラムの名称	即戦力となる人材育成のための学生支援 －観光ビジネスにおける「学び」と「実践」のコラボレーション－
プログラム担当者	石川 保茂
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学では、多様な学習者のニーズに対応するため、平成 19 年度から夜間 2 年制のキャリア英語科に改組し、学生に進学・就職・留学等といった卒業後の進路を明確に持たせ、その希望が達成できる教育課程としている。また、様々なライフスタイルを持つ学生に対応できるように、基礎的な学習を行った上で、学生が進路に合わせてコース選択する方式を導入している。プラクティカルな英語教育やビジネススキル等の職業教育を展開する中で、新たに観光ビジネスの場面での「ホスピタリティ英語」の擬似体験を通して発話練習できる自律学習型教材・装置を開発した上で、働きながら学ぶ学生も経済的に安心して実習できる「有給で就労する実践型のペイドインターンシップ」と組み合わせて、キャリア支援を行う。これにより、明確な職業観だけでなく、実際の場面での英語対応能力と職業教育で学んだ知識と技能の応用力を身に付けさせ、社会で即戦力となる人材育成をめざす。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>京都外国語短期大学においては、大学の目的等に基づき学生支援の目標を定め、長年にわたり、学生の大学生活を充実させる効果において成果を上げていると言えます。</p> <p>修学支援・学生生活支援・キャリア支援という 3 つの支援連携は、現在の組織性に見合う非常に優れた取組です。さらに、「新しいキャリア支援」の取組は、今まで長きにわたって築かれた地域との信頼関係の上に成果をもたらしたとも言えます。「ペイドインターンシップ」という外資系ホテル業界では馴染みの制度をいち早く取り込み、京都という地域に還元しようとしています。</p> <p>また、自主的学習システムを開発し本授業と補完しあう位置づけは重要です。多様な学生を受け入れ、ボトムラインを引き上げる目的があるという点は他の大学等のモデルに相応しい推奨すべき取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	京都経済短期大学
プログラムの名称	地域の中で世界を感じる －異世代・異文化交流を通じた留学生の活躍に向けて－
プログラム担当者	西川 宝
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学では、平成 6 年度以降、地域住民を対象に留学生による語学講座を開講してきた。受講生は延べ 2 千人を数え、講師を務めた留学生も 80 人を超えている。この講座を通して生まれた地域交流を軸に、平成 16 年度から「けいたん留学生交流会」を開催し、留学生が母国の音楽・衣装・言葉遊び等を紹介している。本取組では日本人学生や地域住民が日常的に国際交流を実感できる機会を提供している。一方留学生にとっては企画や運営の過程を通じて、日本語能力や社会性を高めるきっかけとなっている。以上は留学生が国内で活動するものであるが、学生が海外（ネパール）に赴き、学校建設に取組む活動も行っている。</p> <p>今回申請するプログラムでは、①交流会の規模拡大、②ネパール教育支援の充実、③留学生の精神的な支援の 3 点を検討している。特に③では、卒業後も在留している留学生卒業生による学生相談の実施や、ネットを使った留学生同士の交流等を推進する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>京都経済短期大学においては、全学生の 2 割が留学生であるという実態の中で、学生支援に関する独自の目標を掲げ、12 年以上にわたり、具体的・組織的な取組を実施しており、その成果は地域を対象とした「留学生による語学講座」や「けいたん留学生交流会」を通して実証されています。</p> <p>また、今回申請のあった「地域の中で世界を感じる－異世代・異文化交流を通じた留学生の活躍に向けて－」の取組は、今日までの成果を基に、留学生支援を単なる留学生補助に留めるのではなく、留学生が自ら発信することで、学力と社会性を図ること、併せて日本人学生と手を携え、相互理解を深めて自信を持って学生生活を送ること、さらに、地域に国際交流の輪を広げること等、目標も理解しやすく、支援の方法もプロセスも明解で、優れた取組であると言えます。</p> <p>特に、留学生自身が企画・立案する地域との交流会は、学生が主体的に関わることが必須であるため、それぞれの学生が潜在的に抱えている問題を早期に発見し、解決を目指すのに有効な手段であり、他の大学等の参考となる取組と言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	岡山短期大学
プログラムの名称	人命尊重マインド養成支援プログラム
プログラム担当者	浦上 博文
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本プログラムは、学生が人命尊重の精神を備えた人間に成長するよう支援する取組である。この取組は、人命を脅かす事件・事故が頻発する現代社会からの要請に応えるものであると同時に、自尊感情の希薄な学生が自信をもって社会に出立する手助けをするものである。本プログラムは、2年間で重層的に展開する以下の活動によって構成される。第一は、交通安全と救命救急の研修活動である。学生は、体験型学習を通して、社会人・保育者として求められる、人命を守るための知識と技能を習得する。第二は、命をテーマとする講演・シンポジウム開催の活動である。学生は、専門家からの多様なメッセージによって学びを深める。第三は、「命の資料室」を拠点にした活動である。本資料室は、学生が学び活動していく恒常的施設となる。第四は、人命尊重の啓発活動である。学生は、学びの成果を紙芝居やオペレッタ等の形にし、幼児に向け発信する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>岡山短期大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を 50 年以上にわたり、具体的かつ組織的に実施しており、その結果は人格面の成長や、心身の健康増進などで大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「人命尊重マインド養成支援プログラム」は、命を大切にできない若者層の増加に対して、宿泊研修による交通安全教育や、レスキューマネキンを用いた救命救急講習など、体験的な学習を通して人命を尊重する若者の育成を行い、社会に有用な自信のある人材の育成を図るものと言えます。さらに、「命の資料室」の設置、保育所等での公演（啓発活動）を通じて体験的学習を深化させようとする取組は、他の大学等の参考となり得る優れた取組であると言えます。</p> <p>2年間のプログラム実践により、さらに具体的な成果を上げることを期待します。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	別府大学短期大学部
プログラムの名称	進路支援対策一貫システムの構築
プログラム担当者	関谷 忠
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本学の学生は、ほとんどが地元高校出身であり、卒業後は県内企業等への就職や大学への編入学を希望している。また、最近、就職では即戦力となる人材が求められており、パソコンやコミュニケーション能力が重視されている。これらに的確に対応するため、本学では各種進路支援対策を講じてきた。今回の内容は、地域総合科学科のこれまでの対策の充実を図り進路支援対策の一貫システムを構築するものである。主な内容は、①大分校に進路支援プラザを新設し、進路支援の充実、情報検索のためのパソコンの整備。②入学前の学生に対する先輩との懇談会新設、③1年前期の進路対策講座や宿泊セミナーの充実。④1年夏休みの基礎学力充実講座の新設。⑤1年後期の進路対策講座の充実、先輩との懇談会、産官学連携のシンポジウム、教職員のFD研修新設。⑥1年春休みのインターンシップ交流の新設、進路対策講座の充実。⑦2年次の進路選択実践講座の新設等である。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>別府大学短期大学部では、意志決定・運営面で組織化が進んでおり、学生支援を行う上でも各部署との連携が整っており、本取組においても「生きる力」「人間力」を身に付けさせて学生の進路保障を実現するという意識を教職員が共有して臨んでいます。なお、SDがFDに包含されているものの、今後は個別にSDでも学生支援のための研修会を行う予定としています。また、二つのキャンパスを持つ短期大学であるため、学生への指導面に濃淡が出る心配もありましたが、創設の「進路支援プラザ」を学生が利用することにより、適正な進路指導等が適宜、相互交信により行われることとなります。さらに、指導する際に用いられる学生の「電子カルテ」については、教職員の情報の共有化からは望ましいものの、個人情報管理の観点からは心配もありましたが、事前に学生・保護者から利用目的についての承認を得ていることや開示担当者や開示範囲の限定もあり、配慮されています。</p> <p>2年間を9期に分けて、学生の進路に関しての成熟過程を考慮して取組を用意した点は独創的です。入学前指導についても各高校側の理解と協力があるので導入に関しては問題ないように思えます。まだ進路のはっきりしていない1年生については「担任制」をとり、具体的に志望が定まった2年生については「ゼミ制」をとるなどで弾力的に運営されています。今後はこの取組を地域総合科学科から全学科へと展開していく計画もあり、PCの活用により、より高度化した学生支援が可能と考えられます。</p> <p>また、この取組の進行中でも（学内の）第三者による評価を行い、数値目標達成の度合い等の客観性も一部担保されています。</p> <p>以上のことから、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	八戸工業高等専門学校
プログラムの名称	地域資源と学寮を活用した人間力の育成 －国際的エネルギー開発拠点等との連携による統合的學生支援メンタープログラム－
プログラム担当者	菅原 隆
<p>(プログラムの概要)</p> <p>少子化や友人関係の希薄化により、子供達が他者との関わりの中で協調性や責任感を身につけることが難しくなっている。このような背景のもと、国際的視野やコミュニケーション能力の育成、課題解決能力の育成に加え、人間力の育成に対するニーズが高まっている。本プログラムでは、国際的エネルギー開発拠点（ITER）やアメリカとの交流を深めようとしている三沢市・八戸市の取組等の地域資源と、学生の半数が生活している学寮を有機的に連携させることにより、放課後や休日の課外活動等を利用して地域社会と積極的な交流を図りながら学生への支援を行う。具体的には、学寮における指導寮生制度や他に先駆けて行ってきた寺子屋（先輩による学習支援）等で実績のある先輩が後輩を支援するメンター制を更に発展させ、メンターとして地域の人材をも活用することにより、上記の社会的ニーズに対応した統合的な学生支援メンタープログラムの構築を図る。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>八戸工業高等専門学校においては、「誠実・進取・協調」を基に、人間性の育成を基本理念とし、さらに国際的視野を持つこと、創造性の涵養、コミュニケーション能力の育成などを視点に取り入れた学習・教育目標を平成 14 年に掲げ、学生の教育・支援を行っています。</p> <p>今回申請のあった「地域資源と学寮を活用した人間力の育成」の取組は、学生に責任感と協調性、さらに国際的視野やコミュニケーション能力の育成等、人間力の育成に視点を置いた総合的な学生支援メンタープログラムの構築を図ろうとするもので、経験豊富なメンターが経験未熟な人に助言やアドバイスをするメンタープログラムを学生生活に導入し、学校が一体となって幅広い人間関係に対応できる学生を育成するという取組です。さらに、貴校が従来から取り入れている学科横断型プログラムに学年縦断型のメンタープログラムを導入することで、在校生のみならず卒業生や社会人等の地域資源を活用するといった展望も開けるなど、他に見られない工夫ある取組であると言えます。こうした点から、社会的ニーズにも対応できる取組と言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	宮城工業高等専門学校
プログラムの名称	学生の社会力を育成する野田山プロジェクト －地域に開かれた総合的な学生支援システム－
プログラム担当者	飯田 清志
<p>(プログラムの概要)</p> <p>高等専門学校は、低学年生は高校生と同年齢にあたり、高学年生及び専攻科生は大学生と同年齢にあたる。この大きな年齢幅の学生をそれぞれの年齢層の学生の気質や精神の発達度を踏まえた適切な学生支援により、社会力のある学生を育成し、地域社会へも貢献出来る技術者を育成することを目的とする。</p> <p>この目的のために「自立支援プログラム」・「教育実践プログラム」・「地域貢献プログラム」を3本の柱とした学生支援システムを、本校所在地の名称から「野田山プロジェクト」と称し学生支援の充実を図る。</p> <p>「自立支援プログラム」は、情報伝達網による支援及び学習アドバイザー制度により学生の自立を図る。</p> <p>「教育実践プログラム」は、わくわく体験教室及びリカレンジャーによる教育実践をとおして学生の勉学意欲の向上を図る。</p> <p>「地域貢献プログラム」は、地域社会との連携及びミニ FM 局の開設による防災意識の向上などにより学生の社会力の向上を図る。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>宮城工業高等専門学校においては、多様化する新入生などの状況の変化、学校が立地する地域の環境を考慮し、明確な理念の下に、組織的に学生支援を展開しています。</p> <p>今回申請のあった「社会力のある学生」、「地域社会へも貢献できる学生」の育成を目指す「自立支援・教育実路・地域貢献」の3プログラムは、ICT技術を柔軟に活用し、学生支援のさらなる向上を狙う手法として評価できるものと考えます。</p> <p>また新プロジェクトに学校の立地名を冠するなど、一貫して地域の核として成長しようとする意気込みが見られ、高等専門学校のあり方の一つとして他の参考となる取組と言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	仙台電波工業高等専門学校
プログラムの名称	発達障害を持つ学生のための特別支援室
プログラム担当者	野田 泰久
<p>(プログラムの概要)</p> <p>近年、本校に於いても発達障害の学生が増えており、今後も高専では入学試験合格者に占める発達障害の学生の割合は増加することが予想される。そこで、2年前に始めた特別支援教育推進室の経験を活かし、主に発達障害のある学生向けの学生支援を充実させる為に、本プログラムによって特別支援室を立ち上げる。入学時に得た情報を基に、クラス担任、学科長、教務担当副校長、学生相談室長、一般科目担当教員、専門科目担当教員らで支援グループを構成し、当該学生の支援を行う。特別支援室には、教職員の目の届く部屋を指導室として準備し、当該学生のパニック時に備えた緊急時居場所として使用すると共に、学習支援や高学年での進路指導の為に訓練に利用する。発達障害関係の学習や講習を行い、教職員の知識を広めながら連携を図る。全ての記録をまとめ、事例報告やノウハウの蓄積を図る。これらの設備やノウハウは学生相談及び一般学生の学生支援にも役立つ。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>仙台電波工業高等専門学校においては、学生支援に関する理念・目標に基づき、日常的業務を通じた支援・制度や担当による支援・専門的支援の3レベルからの取組が着実に実施されております。特に、平成17年からの「特別支援推進室」における学生支援は、他に先駆けて発達障害を持つ学生の支援として取り組んだもので、対応数は5件と多くないものの、確実に重大な成果を上げていると言えます。</p> <p>今回申請のあった「発達障害を持つ学生のための特別支援室」の取組は、この「特別支援推進室」の専門的支援を、今後の対象学生の増加や受け入れ学校としての的確に対応するために、体系的な取組として全学的に発展させ、機能拡大を図るためのもので、現代社会が抱える問題「発達障害を持つ児童・生徒・学生」への対処と、当該学生への支援のニーズに応えるためのものとなっています。</p> <p>この取組は、「発達障害者支援法」の制定・文部科学省「発達障害児支援教育」の実施に見られるように、新たな社会的ニーズでもあるニート・フリーターの問題への対処にもつながるものであり、高等専門学校・大学での教育上不登校・留年等の原因にこうした発達障害が存在するケースも見られる中で、重要かつ先駆的な取組として評価できるものです。</p> <p>発達障害を持つ対象学生ごとに「支援グループ」を組織して、綿密な情報交換の下に適切に対処すると同時に、「特別支援室」の設備を充実させることで、パニック時の緊急避難場所に留まらず学習支援・進路指導の場として活用し、関係資料を備え教員の資質向上を図り、事例報告を蓄積して将来に資するなど、実施体制・計画ともに現実的で堅実であると言えます。</p> <p>この取組によって発達障害を持つ学生の支援の基盤が形成され、将来の発展・深化につながることを期待できる非常に優れた取組として、大いに評価できるものであり、他の高等専門学校・大学等にとって参考となり得る社会的・教育的に意義深い取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	福島工業高等専門学校
プログラムの名称	マルチメディア活用型ピアサポートシステム －マルチメディア技術による学生相互支援と高専型学習弱者支援－
プログラム担当者	根本 信行
<p>(プログラムの概要)</p> <p>本プログラムは、学生が相互に助け合う手段を提供するものであり、具体的には、本校の特徴でもあるコミュニケーション情報学科（工業高専内の文系学科）でこれまで培われたマルチメディア技術を利用して、学生同士が相互に情報交換可能な「マルチメディア活用型ピアサポートシステム」を構築・運用する。</p> <p>構築するシステムでは、ホストコンピュータと学生が持つモバイル端末を利用して文字ばかりでなく映像、写真、音を利用して学生同士が日常的に勉学や生活についてコミュニケーションをとり、相互支援できる。さらには、体調不良の学生や課外活動等で欠席した学生、または、授業内容を再確認したい学生等が当該システムに記録された授業ビデオや板書の写真などをリアルタイムまたは自由な時間に活用できる等学生の生活学習支援を行うシステムである。</p> <p>本システムには、側面から学生を支援できるように教員や保護者の参画も可能である。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>福島工業高等専門学校においては、学生支援を明確な理念に基づき組織的に展開しています。文武両道の校風、しっかりしたアドミッションポリシーを持ちつつ、学生の相互援助の風潮を高めてきているなど大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「マルチメディア活用型ピアサポートシステム」の取組は、コミュニケーション情報学科（工業高等専門学校の文系学科）で培われたマルチメディア技術を仲間意識の強い学生が利用するものです。高専型学習弱者－まじめで内向的な性格ゆえに頻繁に教室で体調不良となり授業を受けられなくなった学生を支援することで、仲間の学生に社会から要求される協調性・奉仕の精神を学ばせることが可能となっている点や、モバイル端末を採用することで、ユーザー参加型のシステムである点など実現性の高い工夫の取組です。</p> <p>特に、構築するシステムが、ホストコンピュータと学生の持つモバイル端末を利用し、文字だけでなく映像、写真、音を利用して学生同士が日常的に勉学や生活についての情報交換により相互支援を図る点や、体調不良や課外活動等で欠席した学生及び授業内容を再確認したい学生が記録された映像などの情報を利用して生活学習支援を行う点、教員や保護者の参画も可能であるなどの拡張性に富む点など、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	長岡工業高等専門学校
プログラムの名称	長岡高専地球ラボによるキャンパスの国際化 ー小さな高専で広い視野を持った国際人に成長するための学生支援プログラムー
プログラム担当者	涌田 和芳
<p>(プログラムの概要)</p> <p>急速に進展する産業のグローバル化に伴い、技術者教育には国際性の育成が強く求められている。</p> <p>本取組は、これを学生支援の観点から新たな社会的ニーズと捉え、内外交流の範囲が限られがちな高専生活（小さな高専）の中で、学生が国際人として大きく成長する基盤を養うための支援環境づくり及び教育プログラムの提供を目的とする。</p> <p>具体的には、これまでの本校の学生支援活動及び留学生受入実績を基に、学生の国際性涵養を支援する拠点として地球ラボを設置し、長岡市国際交流協会等の地域団体との連携を図りつつ、留学生と日本人学生との日常的な交流を最大限に引き出し、双方にとって効果的な国際理解環境を創出する。</p> <p>留学生を、支援の受け手から学生全体の国際性を育成する担い手として位置付け、活躍させる点が本取組の特徴の一つである。これにより高専低学年からの国際理解教育の充実、留学生、日本人学生双方向の活動による国際性の育成が期待される。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>長岡工業高等専門学校においては、自主・自立の精神に貫かれた実践的技術者の育成を目標として、入学から卒業まで一貫した学生支援を行っています。また、学生支援に対する現在の取組も、社会や学生の双方向の関係で組織的に行われており、それぞれのニーズを捉えています。グローバルゼーションへの対応についても学生海外派遣研修を実施して大きな成果を上げています。FD、SD並びに評価改善については、必ずしも十分ではありませんが、留学生の支援体制は十分整っているとと言えます。</p> <p>今回申請のあった「長岡高専地球ラボによるキャンパスの国際化」の取組は、国際性が求められる社会ニーズを的確に捉え、内外交流範囲の狭い工業高等専門学校の生活を支援するもので、新しく地球ラボを設置して、現在受け手となっている留学生を担い手として位置づけ、国際性を育成するものであり、支援プロセスが明確で、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>すでに留学生を積極的に受け入れ、本申請の取組に対する準備が行われており、計画が確実に実現され、発展する可能性があるとして十分期待できます。また、補助期間終了後については、雪つばきの会やNPOを利用するなど、支援体制が構築され、将来性の見通しも十分認められることから、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	石川工業高等専門学校
プログラムの名称	学外連携活動による人間力向上教育システム －能登半島地震被災地復興支援を通して－
プログラム担当者	松田 理
<p>(プログラムの概要)</p> <p>学生の人間力*の向上を目指す教育システムを、能登地震被災地復興支援活動を通して構築する。本提案において目指す新たな教育システムは以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. インターンシップやボランティア活動等を含む学外実地教育を社会参加型科目群として別枠で設定し、必修化する。 2. 社会参加型科目群を各学科、各専攻の通常科目群の実践演習単元として位置づける。また、必要に応じて卒業研究など、相当科目に読み替える。 3. フォーラムや報告会を開催し、学生、教員ならびに現場のステークホルダーに成果を還元すると共に、合同評価委員会を設置し、活動を評価する。 4. 第三者を含む新教育システム評価委員会により、教育システムの検討を勧告、改善を図る。 <p>*人間力向上に求められる能力</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人間関係を理解し構築・維持できる能力 2. 問題の状況、また背景や原因を理解・把握できる能力 3. それらを踏まえた上で課題解決策を考え、実行できる能力 	
<p>(選定理由)</p> <p>石川工業高等専門学校においては、学生支援に対する理念と目標を人間力向上と自己実現を目指すことで明確に位置づけています。学生支援に関して社会的ニーズ、学生ニーズを的確に捉え、理念に基づき、外部の関係機関と連携を取りつつ組織的に支援プログラムを実践していることが十分にうかがえます。</p> <p>学生支援を行うにあたって、学生支援の重要性を説く講演会、また、専門的知識や能力の向上を促すセミナーの企画がFD委員会の主催で企画され、多くの教職員が資質向上の意図の下で参加しています。学生支援の取組後には、評価項目を設定し、適切な評価が行われ、結果は次の改善のために十分活用されていると判断できます。なお、学生支援に対する現在の基本的取組は、教育活動全般にわたって入学から卒業まで総合的に実施され、それぞれの取組が体系的に機能しており、学生支援の充実に地道に取り組んでいるように思います。</p> <p>今回申請のあった取組は、能登半島地震被災地復興支援という地域の要望に沿ったものであり、貴校が従来から積極的に実践してきた地域貢献です。こうした支援活動は、実践的、創造的な技術者を育成する教育目的に沿っているとともに、教育活動・研究活動にも関連性を持っており、この取組の趣旨・目的は十分意義があると認められます。独自性、有効性も十分認められ、実施計画が適切であり、実現され、発展する可能性が十分期待できます。</p> <p>従って、学生支援に対する現在の基本的考え方及び社会的ニーズ等に対応し、特段の工夫などが行われ、著しい効果が期待される新たな取組として非常に優れていると判断します。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	鈴鹿工業高等専門学校
プログラムの名称	C A T V 局と連携した想像設計力発現の支援 － P I C (Practice-Imagination-Creation) サイクルを指向した創造的技術者育成支援－
プログラム担当者	桑原 裕史
<p>(プログラムの概要)</p> <p>社会構造や産業構造の変化に伴い創造性豊かな技術者の育成が大学や高専に求められてきた。このため高専では低学年から授業や実験により実践的な技術や知識の習得を目標に教育を行ってきたが、社会のニーズは想像力や発想力等人間力を兼ね備え飛躍的な想像・設計力を発揮できる技術者に向かっている。この力は授業や実験のみで涵養される能力ではなく、学生が自主的で挑戦的な取組に積極的に参加し、それを完成していく過程からふつふつと醸成される感性である。今回、この挑戦的な取組として、地元ケーブルTV局との連携により、学生の企画制作によるTV番組の定期的な放映を核に、若者が保有する潜在的な自己表現願望（承認要求）を刺激する様々な企画（インターネットラジオ放送や各種出版物の自前制作と配布等）等、学生の積極的な参加を呼び起こす場を設け、その実践の中で知らず知らず必要な想像力等の能力が醸成される学生支援を計画するものである。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>鈴鹿工業高等専門学校においては、学生支援に関する明確な理念・目標に基づき、学外の連携を含めた体制を整えて、幾多の面にわたる綿密な学生支援を展開し、高い卒業率や各種大会・コンテストでの活躍など各種方面で多大な実績を上げており、入試倍率の高さにも反映されていると思われます。</p> <p>また、今回申請のあった「C A T V 局と連携した想像設計力発現の支援」の取組は、創造性豊かな技術者の育成といった社会のニーズに応えるために、今までの現代GPへの取組経験を生かし、地元ケーブルTV局との連携による学生の企画・制作番組（学生の創造的活動・ボランティア活動等）の地域放映・学内放映、インターネットラジオ放送、学内出版局の開設による各種出版を通じて、現代学生の自己表現願望といったニーズを満たし、学生の想像力、発想力とデザイン力を醸成する取組となっています。</p> <p>特に、「挑戦的な取組」との表現のとおり、他に類を見ない独自性を持ち、新しく意欲的な取組でありながら、しっかりとした連携組織を持ち、将来展望も含めた実施計画並びに評価・改善策の下に、地域・社会並びに学生のニーズに応え、学生の資質向上、地域・社会への貢献、工業高等専門学校の認知度の増進等大きな成果が期待できる取組であり、他の大学等にとっても大いに参考となる大変優れた取組であると判断します。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	松江工業高等専門学校
プログラムの名称	○JTによる学生の自主性を育む支援 －教職員のカウンセリングマインドと学生のリーダーシップ能力の向上－
プログラム担当者	勝部 豊
<p>(プログラムの概要)</p> <p>「価値観の多様化」がいわれ、多様な選択肢からの自己責任による選択が求められている。だが将来の自分のための選択には、具体的な将来像の獲得と自己変革の積極的な姿勢が必要となる。</p> <p>申請校では、自己を向上させようとする自主性を育むことを教育方針としてきた。まず1～3年を「自主性を育てる段階」とし、多様な学生に対応する手厚い指導を行っている。そして4・5年を「自主性を伸ばす段階」とし、自己選択の姿勢を求めている。またキャリア教育により、将来像の明確化を促している。</p> <p>しかし、学生の質的な変化により的確に対応するため、OJTによる2つの新しい取組を始めたい。第1に、多くが科学技術を専門とする本校教職員のカウンセリングマインドを専門家の助けを借りて向上させる。第2に、学生のリーダーシップ能力を向上させるため地域の小中学生を対象にスポーツ講習、技術講習を行う。</p> <p>この学内外の取組により、学生の自主性を育む体制を確立する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>松江工業高等専門学校においては、学生支援に関する目標等に基づき、学内の組織及び学外の諸機関との連携等によって学生支援の取組を着実に実施されており、その結果はISO14001の取得において実証されるように環境問題の真摯な取組と継続的な努力に裏づけられています。</p> <p>また、今回申請のあった「○JTによる学生の自主性を育む支援」の取組は、「価値観が多様で変化の激しい現在社会の中で自己の明確な将来像」を見出すことの難しい学生に対して『自主性を育み伸ばす』ために、学生のリーダーシップ能力と教職員のカウンセリングマインドの向上を意図して、○JT手法による支援プログラムであり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>特に、○JTによるカウンセリングマインドの向上は学生支援の成否を決める鍵であり、学生と教職員との協働的な能力向上プログラムで、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	呉工業高等専門学校
プログラムの名称	高専生テクノショップ育成 －経営体験を組み込んだ新時代の進路選択支援プログラム－
プログラム担当者	山岡 俊一
<p>(プログラムの概要)</p> <p>これからの高専生にとっては将来「被雇用者」だけでなく「起業者」となることも重要な選択肢となることに鑑み、進路選択支援の一環として学生に「経営」を体験させる仕組み「呉高専テクノショップ (KTS)」を導入する。「KTS」は法人格をもつ有限責任事業組合 (LLP) であり、呉高専教職員有志出資の「KTS 推進会」と「呉信用金庫」および「呉高専発ベンチャー企業」等が共同して設立する。「KTS 推進会」は呉高専生提案の「高専生ショップ」の擬似設立・経営を行わせる。取扱商品は、高専の「ものづくり教育」の副産物および独自開発製品である。呉高専は、活動スペースを提供するとともに、既存のキャリア支援プログラム枠を利用した導入教育をおこなう。経営実務経験者を特任教員として雇用し、ショップ経営指導を行う。2 年後からは LLP 参加事業者数および出資額の増加と商品の拡充を図り、自己資金による継続実施をめざす。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>呉工業高等専門学校においては、教育理念に基づき教育活動と研究活動に関連性を持たせ、学生の能力向上に努めています。その結果、「科目間教員ネットワーク会議」の実施により、一般科目と専門科目の連携、専門科目間の連携を取ることによって、授業内容や教育プログラムの充実化を図ることで大きな成果を上げていると思われます。</p> <p>こうした取組の中で、今回申請のあった「高専生テクノショップ育成」は、現在実施されている地域社会と連携した人間力育成プログラムや、入学時から卒業までの全期間を通じて行われるキャリア形成支援 (SAPAR) を、新たな視点から大きく展開させるために有効な取組と判断します。また、学生に技術関連商品の開発・販売擬似会社「呉高専生テクノショップ (KSS)」の経営と実務を担当させる等、学生にとっては「ものづくり」が実施できる良い機会だと思えます。工業高等専門学校という「ロボット」というイメージがありますが、その他のテクニックを「ものづくり」に役立てるための良い取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	佐世保工業高等専門学校
プログラムの名称	高等専門学校での特別支援教育推進事業 －発達障害のある学生に対する支援に関する共同体的取り組み－
プログラム担当者	松尾 秀樹
<p>(プログラムの概要)</p> <p>技術者教育において、理工系学生に多いといわれる発達障害を持つ学生への教育支援は、さまざまな能力や特性を持った人々が共生できる社会を形成するために、解決すべき重要な課題である。本プログラムは、発達障害のある学生に対する具体的な支援の在り方に関して、支援実績が豊富な佐世保工業高等専門学校と、調査・研究活動において先進的な業績を有する釧路工業高等専門学校が共同事業として実践的に取り組み、高等専門学校全体における特別支援教育体制の整備・拡充を図る。そのため、両校が、発達障害のある学生に対し、その状態に応じて、修学支援、就労支援、ソーシャルスキル・トレーニングやメンタルケアなどの生活支援を、外部専門機関等と連携を取りながら実施し、その取組みを相互評価することにより、実際に稼動する特別支援教育システムを構築する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>佐世保工業高等専門学校、並びに釧路工業高等専門学校においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を多年にわたり、具体的かつ組織的に実施しており、特に平成 15 年度以降、学生のメンタルヘルス支援への取組は顕著であり、その結果は科研費（基盤研究）の採択、特別支援教育総合研究所の訪問調査を受ける等において実証されるように、大きな成果を上げていると言えます。</p> <p>また、今回申請のあった「高等専門学校での特別支援教育推進事業－発達障害のある学生に対する支援に関する共同体的取り組み－」は、発達障害のある学生のみならず、悩みの対象が明確になっている学生への支援、並びに成績不振や授業に欠席の多い学生への支援に関し、発達障害のある学生に対する支援を敷衍した系統的で抜本的な対応策が明確に示され、他に見られない工夫ある取組であると言えます。</p> <p>特に、発達障害のある学生に対する支援への取組に当たっては、当該学生が抱えている問題を明確に把握するために佐世保・釧路両工業高等専門学校間、及び関係諸機関との連携、ピア・サポートや保護者の協力を仰ぐなど、現実的なレベルでの早期発見・早期対応を目指すものであり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

**平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
選定プログラムの概要及び選定理由**

大学・短大・高専名	鹿児島工業高等専門学校
プログラムの名称	新たな地域連携型クラブ活動支援プログラム
プログラム担当者	三角 利之
<p>(プログラムの概要)</p> <p>クラブ活動は、学生の心身ともに調和の取れた全人教育の観点から、極めて重要な教育活動である。本校では、全教員がクラブ活動の顧問として、積極的にその指導にあたっている。しかし、教育現場における人的、物的、財政的等の要因により、クラブ活動の指導教員が、その指導内容、安全な活動の実施について十分対応できていないのが現状である。</p> <p>そこで、本プログラムでは、総合型地域スポーツクラブ「NPO法人隼人錦江スポーツクラブ」や「霧島市教育委員会」と連携し、地域に潜在する有能な人材を外部指導者として登用し、学生の活気あるクラブ活動を積極的に支援するための学生支援システムを構築する。さらに、クラブ活動を地域住民の生涯学習の場としても機能させ、地域住民が学生とともにクラブ活動に参加することによって、世代間の交流や地域住民との交流を促し、クラブ活動を通じて学生の人間性の涵養を図る地域連携型の共同教育を実施する。</p>	
<p>(選定理由)</p> <p>鹿児島工業高等専門学校においては、学生支援に関する理念と目標に基づき、今回申請のあった「新たな地域連携型クラブ活動支援プログラム」の取組は、総合型地域スポーツクラブという新しいクラブ組織と連携することにより、学校という画一的な環境を飛び出し、一般社会の人々と接することにより、学生の人間性を高める上で役立ち、さらには地域貢献に発展する可能性を持った取組であると言えます。</p> <p>独立行政法人化により、工業高等専門学校が将来を見据えた新たな取組にチャレンジする中で、クラブ指導に十分に対応できない場合にも、有能な指導者の下で学生の競技力向上を目指し、より良い環境造りに貢献できるものと判断します。学生が勉学以外の分野で活躍の場を与えられるということは、学校生活に対する意欲向上に繋がるものと思います。他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	